
Dreame Researcher

音無声無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dreamer Researcher

【著者名】

NNコード

N9154Z

【作者名】 音無 声無

【あらすじ】

これは魔法と関わり合つことになってしまった男が、夢を叶えるために努力する話。
そして夢を叶えながら努力する話。

俺の日常

「ふつ、またつまらぬものを切つてしまつた…………」

俺の後ろには俺が切り捨てた男が倒れている。

男はピクリとも動かず。

床は赤い液体に濡れている。

「龍斗、お前が悪いんだ」

手に持つた得物を腰に収める仕草をしながら言つ俺の声は震えていた。

怒りとそれを遙かに超える悲しみに

「お前が！ お前が！ 俺の楽しみにしていたアニメのネタばれなんかするから！… だからこうなる！」

「いやいやいや、海斗が持つてゐる箒だからー 龍斗もノリノリでトマトジュース撒き散らしながら倒れたけど、海斗、君が持つてるのただの箒だから！…」

「何を言つ達也！ 達人の手にかかるばただの箒で鉄が切れる！ なら俺の手にかかるば龍斗程度造作もない！」

しかし、そう言いきつた俺の背後から俺に絶望をもたらす言葉が聞こえた。

「その後、エイトはキングを新必殺技ファンタムクラッシュで倒したのだ」

まさか、まさかそれは！

「そしてエイトは無事にエリス姫助け出した」

「龍斗、貴様あ！ アルカディアサーラガー2話の最後までネタばれするとは、覚悟はできているんだろうな」

振り向いたそこにいたのはつこさつき俺が斬鉄剣（ ただの簞 ）で切り捨てたはずの龍斗だ。

「覚悟？ それをするのは貴様だ、海斗。俺は忘れてはおらんぞ。先週貴様が俺の大好きな魔法戦隊ガントレットを馬鹿にしたこと！…！」

何を言い出すかと思えばそんなことか

「あんなものを好きな貴様の精神を疑うわ！ 何だあれは！ 正義の味方なんて自称してるくせにやることと言つたら、魔法で数十人に分身して1人か2人の悪役を数の暴力で袋叩きにするという、正気を疑う内容だらうが！！ あれが子供向け特撮アニメとして放映されているのを見て俺は大好きな翠屋のシュークリームを吹き出すはめになつたんだぞ！ どうしてくれる！」

週に1回しか食べることのできない、あの翠屋のシュークリームが無駄になつたときのあの絶望を俺は忘れない。

「なんこと、知るか！ それに確かにあのアニメは悪役のイケメン

達がなんとかガントレットに勝とうと修業をし、新たな技を編み出していて、むしろ悪役側が主人公っぽいが、それでも！ イケメンをフルボッコにするといつー点において、あいつらは俺達の正義の味方なはずだ！－

「くつ」

反論でakin。

イケメンは敵だ。

確かにそれは俺たちにとって完全なる真理だ！

だが、だが！

「だが、あのアニメは辛い現実を直視させてくるだろうが！ 脚本家は何考えてんだよあれは！ ガントレット側が悪役を撃退する毎に、はじめはこちら側だったヒロイン達が必死にガントレットの物量に勝とうとしている悪役を見て、次々悪役側に惚れて敵側に寝返つていくとか、ほんと何考えているんだよ！ 一応悪役側は人類の殲滅なんてしようとしてんだぞ！ あれか、イケメンは正義だとでも言うつもりか！？」

「確かに、そのことは俺も辛く思っている。だが、それでも俺はあのアニメが好きなんだ。きっと、きっとガントレットはイケメンに目にものを見せてくれると信じているから－－」

龍斗の叫びが教室に響く。

龍斗の言つ通り、最終的にガントレット側が勝つなら俺にとっては問題はない。

イケメンは死ねばいい。

しかし、あのアニメ、最終的にはヒロイン達が悪役側を改心させて終わりそうな雰囲気なんだよな。

そうなれば絶対ガントレット側は空氣と化す。

そんな光景は見たくない。

「だから海斗、俺の好きなアニメを馬鹿にするな！」

俺と龍斗は教室の真ん中で睨み合ひ。

一步も譲ること無くお互ひの顔を睨みつけ合ひ。

このままでは埒が明かん。

「龍斗、男が譲れないものがある時にやる」とは一つだ

「そうだな」

俺と龍斗は同時に構える。

龍斗は漫画First Stepの真似をしてボクシングの構えを、俺は手に持っている斬鉄剣で居合いの構えを取る。

もちろん意味などない。

鞘もないのに居合い抜きはできない。

だがモチベーションは上がる。

先に動いたのは龍斗だった。

「いぐぞ、海斗！」

一気に左足から踏み込みながら、左腕でジャブを放つてくる。しかし、そんなものは全く怖くない。

「龍斗、愚かなり」

俺は焦ることなく斬鉄剣を振り抜く。

素手の龍斗と笄をもつた俺とでは俺の方がリーチが長いのは当然だ。だから、龍斗のジャブは俺には届かず、俺の振り抜いた斬鉄剣は龍斗の身体を切り裂く。

「くつー！」

俺の一撃を受けた龍斗は追撃を避けるために机の間を縫うようにして距離を離す。

ちつ、俺の位置からだと机と鞄が邪魔で行き難い場所に逃げやがったな。

だが、その位置はお前にとつても不利な位置だ！

斬鉄剣を片手で持ち、その長いリーチを生かして机越しに龍斗に斬りかかる。

それに対しても龍斗がとつた行動は簡単なものだった。
ちょっと後ろに下がる。
ただそれだけだ。

だが、ただそれだけで俺の一撃は龍斗に届かなくなる。

攻撃を避けられたせいで身体が泳いで隙ができる。

しかし、間に机がある以上龍斗が即座に反撃に移ることはできない。

必ず机を迂回する必要がある。

その間に俺は態勢を立て直せばいい。

そう俺は思っていた。

だが、龍斗は俺の想像を遥かに超える行動に出た。

「俺はすずかちゃんに告白するまで死ねない！」

なんと奴は死亡フラグを叫びながら、机を飛び越えてドロップキックをしてきやがった！

くつ、此処は俺も死亡フラグを叫びながら何かやるべきか？

そんな馬鹿なことを考えていたせいで避けることもできずに俺は龍斗のドロップキックをくらい、龍斗と一緒に倒れる。

くつ、中々いい一撃だ。

だが俺は負けん！

素早く龍斗から身体を離し立ち上がるのと龍斗が立ち上がるの同時だった。

そして、俺は龍斗の後ろを見てしまった。

やばいぞ死亡フラグ、さすがだ死亡フラグ、仕事振りが半端ないな。

「龍斗よ、死亡フラグというものを知っているか？」

「もちろんだ！ だが、俺はこの程度の死亡フラグ程度乗り越えて見せる！！ いや、すずかちゃんに告白するまで死んでたまるものか！！」

やべえ、やべえぞこには、マジで龍斗が死ぬかもしれん。

奴は気づいていない。

自分の死がすぐそこには迫っている」とこ

すまん龍斗、土下座をしておくから許してくれよ。

だが、土下座した俺を見た龍斗のセリフは俺の考へ得る限り最悪のものだった。

「ふつ、俺のすずかちゃんへの愛の勝利だ！！」

龍斗お前は気付かなかつたのか？

教室にいる皆がお前に送つていた、止めろのままでは死ぬぞ！！

という視線に！

「えーと、あの、そのなんといつか気持ちは嬉しいんだけど、その……」「…………」

勝ち誇っていた龍斗の顔から一気に血の気が引いて行き、汗がだらだらと流れ始めているのが分かる。

龍斗の首が油の切れたブリキ人形のような速度で後ろに回していく。

やめろ、止めるんだ、龍斗！

今後ろを向けばお前は死ぬぞ！

そう言いたかつたが、俺の口は動かなかつた。

龍斗が振り向いたその先にいたのはアリサ＝バニングスと高町なのは、そして龍斗が盛大に告白すると宣言した円村すずかだつた。

凍りつく空氣、教室にいる人間の誰もが動けない。

「えーと、いや、その、あのな」

じどうもどりになつて見れたものじゃないが、俺には見届ける義務がある。

この事態の責任一端は俺にあるんだからな。

.....決して面白そうだからという野次馬根性ではない。決してだ。

当事者の2人は共に慌てふためいて「あの、その」ばかりで碌に会話にもなつていない。

誰かが割り込んで収集をつけるべきだ。

誰もがそう思つている。

だけどそれと同時に誰もがそんな役割はしたくねえ、とも思つている。

だから誰も動かない。

そう思つていたのに動いた奴がいた。

奴の名はアリサ＝バニングス、このクラスきてのシンデレだつた。しかし今この瞬間奴は勇者にジョブチェンジしやがつた！

「あーもーー まだうつこしいわね！ あんた、男なんじょ！？
しゃきつとしなさいよーー！」

すげえ、凄過ぎるぞアリサ＝バーニングス。
こんなに初々しく青春している2人の間に割り込むなんて常人には
絶対出来ねえ。

漢だよあんたは

これでこの龍斗教室事件は終わった。この教室にいた誰もがそ
う思つたはずだ。

だが、教室の皆の予想を遥かに超えて龍斗は漢を魅せた。

「…………ああそつだな。漢ならしゃきつとしないとな

「えつ、ええそつよ？ 男ならしゃきつとしなさいーー」

バーニングスも龍斗が本当に自分の言葉通りにしゃきつとするとは思
つていなかつたのだろう。
その声に隠し切れない動搖が出ていた。

まあ俺もバーニングスに至近距離で凄まれて怯まなかつた龍斗はすげ
えと思つ。

俺の知る限り同年代でバーニングスに凄まれて怯まなかつた奴は他に
は1人しかいないからな。

「俺、武田龍斗は月村すずかのことが大好きです！ 付き合つてく
ださいーー！」

すげえ、すげえよ龍斗！

お前の月村に対する好意は知っていたつもりだつたけど、それは知つていたつもりでしかなかつたんだな。

精々アイドルに対する憧れみたいなもので、この衆人環視の中開き直つて告白する程にまで月村のことが好きだとは思つてなかつた。というかお前に惚れている女子から俺は相談受けたりするんだが、どうすりやいいんだろうな。

まあそれについてはひとまず考えないよつとしておいつ。それより田の前の問題を解決することが重要だ。

ほら、月村を見てみるよ。

顔真っ赤にして俯いちまつてるじゃねえか。

2人の間にも沈黙が落ちただただ時間だけが過ぎていく。
体感時間では1時間経つたような気もしたが、時計を見ればまだ2分も経つていない。

少しでも早くこの空気を終わらせたいが、龍斗の本気を見せつけられた俺にはこの空気をぶち壊すことなど到底できない。
だが、勇者バニシングスは違ったようだ。

「アンタた、むぐつ」

何か言いかけたバニシングスに駆け寄り咄嗟にその口を手で塞ぎ。
龍斗と月村の傍から引き剥がし、呆然と立っている高町の傍まで下がる。

「ひつー」

口を塞いでいる手が噉まれたが我慢するんだ俺！

俺の悪友の一世人一代の舞台の邪魔はさせねえ！

俺とバニングスが音も立でずに揉み合っているうちに月村も覚悟を決めた様だ。

真っ赤になつてている顔を上げ、途切れ途切れではあるが返事を紡いだ。

「その……ごめんなさい…私はまだ誰とも付き合つ氣はないんです…」

…

その言葉を受けた奴の目からは汗が溢れていた。

あれは断じて涙などではない！

男は泣かない。

だから目から零れるあれはただの汗だ！

「……そつか、きちんと、返事をしてくれて、ありがとう」

途切れ途切れで鼻声になつていてがそれは聞こえない振りをするんだ。

龍斗はそれだけ言つと教室から出て行つた。

俺はバニングスの口を塞いでいた手を離し、奴が出て行つたドアに向かつて敬礼した。

英雄には最高の敬意をもつて接すべきだ。

そう思つたのは俺だけでは無いよつで、教室にいる男子全員が龍斗が出て行つた扉に向かつて敬礼している。

バーニングスが何か喚いているが無視だ。

中々に強力なパンチが腹にめり込む。

……無視するんだ。

ローキックが打ち込まれ体がふらつくが無視するんだ！

股間に向けて蹴りが来ているが無視……出来るか！――

全力で後ろに下がり何とか蹴りを避ける。

「バーニングス！ む前はやつて良い事と悪い事の区別がつかんのか！？ 股間はアウトだろ股間は――」

「あんたが無視すんのが悪いのよ！ それにあんただつて私の胸揉んでたじやない――」

「はつ！ 存在しない胸は揉めん！ 寝言は寝て言え！」

小学3年生に胸などあるものか！
見事なまでに絶壁だらうが！

「そこまで言つたんなら……覚悟は良いわね？」

怖ええ。

なんで小学3年生の女子のくせしてこいつは何でここまで怖ええメ

ンチ切れんだよ。

家は相当な金持ちだといつ話だけど、実はマフィアの娘だったりするんのか？

だが俺に退く気はない。

ここにはやって良いことと悪いことがあることを体に教え込んでやる！

負けました。

完膚なきまでに負けました。

殴りかかっても受け流され、カウンターの拳が腹にめり込み。バニングスの攻撃は面白いくらいに俺に直撃しました。

現在すたぼろです。

教室にいる皆からの憐みの視線が辛かったから5時間目の授業をぶ

つらがって屋上で黄痴てます。

「世の中無情だよな～」

「本当にやつだな」

「ここでは俺と同じく黄痴ている奴もいるから、傷ついた俺の心を癒すのに丁度いい。」

「告白したお前は振られるし、女に全力で殴りかかった俺は返り討ちだぞ。ほんとやつてられないよな～」

「いや海斗、女子に本気で殴りかかったお前に同情する余地はないと思つぞ?」

裏切り者め。

「だが、それにしてもバーニングスのやつ実は『リラかなんかじやないんだろうか? あの身体での威力を出すなんてとても人とは思えんのだが」

本当にあれは俺たちと同じ人間なのか?

俺も同年代の野郎どもとはよく喧嘩しているが、バーニングスほど強烈なパンチを打つてくる奴にはあつたことが無かつた。

「普段の行動見ているとやつは思えないけど、バーニングスもいいところの『令嬢みたいだから護身術なんか習つてたんじゃないのか?』

「やうかなー、そだといいなー。素で女子に喧嘩で負けたとかなれば立ち直れんかもしけん」

後でバーニングスに護身術かなんか習つてるか聞く」と口走り。

「それでさー、失恋した気分ってどんなものよ?」

多少無神経だと思つが俺が一番聞きたかったことを聞くことにした。

「……………海斗、失恋するとは予想以上にショックを受けるものなんだな。泣いている間は悲しかったけど、泣き終わつた今は呆然自失といつかなんといつか、何もする気が起きない」

「燃え尽きたわけか」

「やつかもしれないな」

そんな会話をしていた時にチャイムが鳴つた。
さて聞きたいことは聞いたし、ホームルームに出て帰るとするか。

「龍斗、お前ホームルームには来るか?」

「いやいいわ。やつ少しニヒリティとしてる」

龍斗は俺の間に振り向く」となく答えると、再び空を見上げてぼーっとしだした。

早く失恋から立ち直れよ悪友。
じょあい

その為の切っ掛けは作つてやるからさ。

俺の日常2

さて今日は楽しい楽しい土曜日だ。

午前中に授業は終わり、午後からはいくら遊び呆けても問題ない週に一度の最高の日だ。

日曜？

日曜はサッカーで一日潰れることが殆どで、それ以外のことはできないから除外だ。

サッカーもそれはそれで楽しいからいいけどな。

うん、親に無理やり入れられて始めたが、なかなか楽しめているのは嬉しい誤算だった。

さて、そんな楽しい土曜日になるはずだったのだが、今俺は田の前で起きたあまりにも予想外な光景に呆然自失といったところだ。

なんと、龍斗の靴箱の中に2通のラブレターが入っていた。
繰り返す。

龍斗の靴箱の中に2通のラブレターが入っていた。

な・ぜ・だ！

あれだけ俺と一緒にバカばっかりやつてるおかげで、女子からはそういう対象と見られていなかつたはずの奴が、なぜラブレターなんものを2通も貰っているんだ！

2通も貰つなんてありえない！！

俺は原因を突き止めるべく様々な人間にインタビューを試みた。

1人目 とある茶髪の少女

「龍斗君って昨日までただの三枚目だと思つてたけど、昨日のあの姿はかつこよかつたよ」

あれが原因なのか！？

確かにあれは男らしかつたがたつたあれだけのことでの3年間延々と築き上げてきた三枚目としてのイメージが払拭されたとしても言うのか！？

真実かどうか確かめねば、調査を継続する。

2人目 とある野郎

「ちょっとー 僕のときだけ紹介が野郎つてなんだよー」

美少女は優遇され、野郎は冷遇される。
それが世界の意志だ。

「…………一理あるね」

だろ。

じゃあセーフティーブリーフでお前は龍斗が突然もて出したのはなんでだと思う？

「認めたくないけど龍斗は普段の言動を除けば十分一枚目で通用するからね。そして龍斗は昨日男を魅せたから、それがきっかけになつたんだろうね」

馬鹿な！

1人目の少女の答えと同じような答えだといつのか！

いやこう考えるんだ。

龍斗がこれだけもてるようになつたんだ、俺も男らしさを見せればもてるのでは？

「海斗、君じゃ無理だ。君が三枚目を抜け出してもてるなんて、世界滅亡の危機でも起こらなければ到底ありえない」

そこまで言つたか貴様は……………覚悟はできてるんだろうな？

3人目 とある金髪の少女

もてたいです。

「あなたの親友がぼろ雑巾みたいになつて転がつてるんだけビ？」

俺の纖細な心を傷つけた報いだ！

そんなことより『もてたいです！』

「ああそう。アンタに常識を求めた私が馬鹿だつたわ。それにしてもアンタ、調査の目的が変わってない？」

変わってなどいない。

俺は最初からいかにすれば非モテから抜け出せるかその方法を知る

ために「」の事件の原因の調査を開始したんだ！

「事件つて、まあ、いいけど。延々とアンタと話したくないから
单刀直入に言ひナビ、アンタじや無理よ」

そんな馬鹿な！

俺が本気を出せば女にもぐるぐるに簡単なはずだ！！

「そんな考えを持つているうちは絶対無理よ。いや、それ以前にアンタは言動とかそれ以前に存在がうざこのよ。傍から見てる分には楽しいけど絶対に近づきたくないわ」

ちくしょウ…………田から汗が流れそうだ。
これはいじめなのではないだろ？

そんな思いを込めて近くにいる紫色の髪の少女に視線を向けたが返ってきた答えは無情だった。

「ええっと、海斗君相手だし、『なんものじやないかな？』

類は「」のままいけばきっと言葉で人を殺せるようになるよ。

調査は俺の心に傷を残しただけでなんの成果もなく終了した。

原因が分かっても、それが俺に応用できなければ何の意味もないの
だよ！

世界は無情なものだな。

「いやいや、たったこれだけで世界は無情とか言つてたひどい
しようもなくなるよ？」

達也！

昨日まで非モテだった奴が今日突然リア充野郎に変わるとこいつのは
理不尽極まりないではないか！？

「いや、そう言つて思つたけど、海斗は知らなかつたかもしけないけど海斗は元々ある程度の人気はあ
つたよ。普段の言動のせいでそれをほとんど感じなかつたけどね」

馬鹿な奴め！

今の言動が知られるまで俺達3人の中で一番もてたのは龍斗だとい
うことくらい知つておたつたわ！

だから今まで馬鹿な言動を龍斗と共に繰り返すことで奴が告
白される事が無いようにしておつたのだ！

「最低ね」

「ええと、そういうことしちゃ駄目だよ海斗君」

これは俺から奴への善意を込めた行動だ。

なにせ俺のおかげで奴は女の子を選ぶといつ悪行を犯さずに済んで
いるのだからな！

……といひで貴女方はどう様ですか？

「その歳でボケたの？」

「海斗君、さすがにクラスメイトの船前を防ぐのは酷こよ

お前達がアリサ＝バニングスと田村すずかだとこいつとくらにわかつてゐるわ！」

俺が聞きたいのはやつ事じやない。

なんでお前達がここにいるのかとこいつだ。

この秘密基地の場所は俺と龍斗と達也しか知らないはずだ！

「アンタ、教室で馬鹿みたいな質問を私達にしてきたでしょ？」

馬鹿みたいな質問などしていない、あれは「あー、はいはい、アンタがどう思つてるかなんてどいつもいいかば、質問してたでしょ？」

「あ、してたな。

「で、私達はまたあんたが馬鹿やるんじやないかと思つたわけよ」

思つたわけか。まあ、普段の言動があれだからしようがないな。

「…………分かつてゐるなら、やめなさいよ」

嫌だ！

そんなのは楽しくない。

「…………アンタね。まあ、そんなわけでアンタの馬鹿を止めるためにアンタを監視しようとしたことになつたのよ」

俺のプライバシーはどこに行つた！？

「そんなものがあるわけないでしょ？今まで自分のやつてきたことを思い出しながら。アンタにそんなものを『えたら世界に悲劇が増えるだけよ』

異議あり！

俺は皆に笑いと癒しを『えらべく行動している。

クリオネ上映事件や担任づら事件がそれを証明している…。

「死ねばいいのに」

ただ憎悪だけが込められた声が響いた。

鳥肌が立ち、背筋が凍つた。

ええつと、月村？『冗談でも言つていい』こと悪いことがあるんだぞ？

お前そんなキャラだつたか？

「死ねばいいのに」

ヒシリシと命の危険を感じる。

ええつと、月村様私は何かあなたの逆鱗に触れましたでしょうか？

「うそ、クリオネ上映事件のときね、あの場所に私も居たんだ」

ならばなぜだ！！

あれは皆に溢れんばかりの癒しを『えたはずだ！！

「はじめの一分間だけはね。その後クリオネの再生実験と称してクリオネが切り刻まれるのを見せられたり、捕食中の映像を見せられ

たけどね

ふつ、それはそこまで見たほうが悪い。
見たくなれば、視聴覚教室から出ていけばよかつただけだ。

「死ね」

命令形だと！

「その扉を棒で開けられなくしたのはどこの誰？」

そんなこともあつたような、なかつたような
……だつ、だが、担任づら事件は皆が笑っていたはずだ！

「そうだね。担任の先生がやけくそになつて叫んだ自嘲ネタに、乾
いた笑いが教室に響いてたよね」

……笑いは笑いだと言えませんか？

「言えるわけないよ（わ）！」

……………
「そうですかー。」

おかしいなー、俺は大爆笑して腹筋が崩壊しそうだつたんだがなー。

「で！ 話が逸れたけど、そんなわけでアンタを見張つてたわけよ。
そしたらアンタを見張つてたクラスメイトの一人がアンタが丁度こ

の使われてないはずの教室には言ひたつていうじゃなし。だからアンタが何かしでかさないいうちに、ひつて私達がやつてきたという訳よ」

まあ、到底納得できないが俺達の秘密基地にバーニングスと円村がやつてきた理由は分かつた。

で？
どうするつもりだ？

「ここまではやつておいてなんだけど、今回は特に何もする必要はないみたいね。アンタが告白の邪魔をするつもりだったのなら『ンク』リートに詰めて海に沈めようと思つてたけど、そうじやないみたいだし」

…… わすがに例えが物騒過ぎやしませんかね？

「女の子の恋心を踏みにじるような奴は死んで当然よ

そうですか。

「だけど今回はアンタもそんなことあるつもじゅないみたいだし、特別に見逃してあげるどいつもか協力してあげようと思つてるわよ」

それは助かる。

じゃあバーニングスはこの垂れ幕を教室に飾りつけておいてくれ、月村はここで俺と一緒に紙吹雪の制作だ。

「武田の見張りはしなくていいの？ 準備の途中で教室に戻つたら最悪なんだけど」

龍斗の見張りは達也がやつてくれているから大丈夫だ。緊急時には俺に携帯で連絡する様に言つてある。わざわざも報告っこでに雑談してただろ？

「雑談がメインだったように思えるけどね」

細かいことは良いんだよ。禿げるぞ、バーニングス。

「禿げないわよーーー」

「冗談だ。」

それより手伝うなら急いでくれ、本当ならこの作戦の決行は明日の予定だつたんだ。

準備が半分くらいしかできていない。

「なんでアンタが武田が告白される日の予定を組んでるのよ」

それはもちろん龍斗に惚れてる女子から相談を受けたからに決まっているだろう。

今まで色々と龍斗がその女子に振り向くように工作もしてきたが。あいつは月村に夢中で全く気がつかなかつたけどな。

「意外ね、アンタがそんなことやつてるなんて」

「どうか？」

人の恋愛を見て楽しむのは最高の娯楽の一つだと思つんだが、とうよりお前たち女子も恋愛事については異様なほど食いつくだろうが。

「まあ、そう言わればそうなんだけどね。で、話が逸れたけど明日やる予定だったこれが今日にずれこんだのは何でよ？」

まあ、イレギュラーが起きてな。

俺が相談を受けていた女子以外の奴が龍斗の靴箱にラブレターを入れているのを俺が相談を受けていた女子が見たんだよ。
それで焦つて俺に断りも入れることなく、靴箱にラブレターを入れやがった。

どうせなら先に入つたラブレターを破り捨てるくらいすれば面白かったのにな。

「それやつたら、もし告白が成功しても他の女子から仲間外れにされるわよ」

その通りだな。

さて、バーニングス、雑談はこれで終わりだ。さっさと教室にその垂れ幕を持って行け、紙吹雪もお前と雑談しているうちに月村が9割がた作ってくれたからな。

「アンタ、サボつてんじゃないわよ」

話しかけてきたお前には言われたくないな。

「（）今まで長引いたのはアンタが無駄口叩くからよ」

理不尽な。

「まあまあ、アリサちゃん、私は気にしてないからね？ それより早く飾りつけに行こうよ」

「…………すずかがそいつうんなり écrit」

よし話は終わつたな?

後は体育倉庫から借りてきたこのくす玉に紙吹雪を詰め込んでいくだけだ。

「黙つて借りてぐるのって、盗むのと変わりないわよね」

あー、あー、何も聞こえない。

それに今さらなことだ。

サプライズも詰め込んだ。準備は万端だ。

「ところで今さらな疑問なんだけど、龍斗が本当に里香の告白OKするの? 昨日失恋したばっかしなんだから、OKしない可能性も高いんだと思うんだけど」

なんでお前が俺相談を受けていた女子を知っているかは知らないが、それなら問題ない。

男とは馬鹿な生き物だ。

ちゅうと向かい女子に告白されれば、じゅうと惚れてOKする。

「……あんまり聞きたくなかった答えね。でもそれなら里香の方じやないラブレターの方の告白にOKするんじゃないの？」

バーニングスの言ひとも一理ある。

だがそこは龍斗の幼馴染である多村の幼馴染補正に賭けるしかない。一応多村は龍斗と一番長い時間を過ごしてきた女子なんだ。その間に積み重ねた時間が龍斗の心を多村の方に引き寄せるることをな。

「ああ、そう言えばそうだったわね。家が隣同士で生まれた病院も同じだからねあの2人。一緒に過ごしてきた時間の長さは家族を除いたなら一番長いでしょうしね。……それにしてもアンタって意外とロマンチストなのね」

長い時間を一緒に過ごせばどんな相手にだらうと多少は愛着がわく、そことの間に期待だな。

ここまで準備しておいて多村の告白が成功しなかつたら俺の今までの努力は何だつたんだという話だしな。
それと俺がロマンチストなのは当然だ。

ロマンが無けりゃ人生なんて退屈極まりないだらう。

「まあ、ないよりあったほうが良いわね」

告白の結果を達也が報告していくまでの間暇になるかなと思つていつも一緒にいるはずの高町が一人で先に帰っていたのが気になつたが、バーニングスと話し続けていたおかげで退屈せずに済んだ。

いつも一緒にいるはずの高町が一人で先に帰っていたのが気になつたが、ここ最近はよくあることのようだし、まあ俺にはどうでも

いいことだ。

着信音が鳴った携帯をとる。

「さう、海斗、首尾はどうだ？」

「状況は予想を超えて推移している」

「何！？」

「いつたい何が起じた！？」

「龍斗の奴、里香ちゃんとキスしやがったんだよ……」

「何だそんなことか。

「なんだと！？ キスだよキス！ 海斗、君はこの状況を予想して
いたとしても言いつもりなのか？」

まあな、多村に龍斗が躊躇つよつだつたらキスでもすれば簡単に落
ちると言つた覚えがあるからな。

告白に向かう前の多村の様子から考へると、そこまでやつてもおか
しくないと思つていただけだ。

それに心配するな。

リア充に対する罰は用意してある。

だから達也も見逃すことが無いように教室に来いよ。

「さすが海斗だね。最低なまでに自分の欲望に忠実だ」

「それは当然のことだらう？」

「まず自分が楽しめることじやなければ、俺はここまで力を注いだり

せんよ。

電話を切る。

さて教室にいる皆さま、告白は無事に終わったようだ。
達也からの報告によれば2人は幸せそうな顔をして教室に戻つてく
るといつ話、詰つていうならやることをやるだけだろ？

改造クラッカーは持つたか？

掛け声のタイミングと内容は覚えているか？

よし問題ないようだな。それでは待つぞ。

後、達也が入つてくるだらうがその時に間違つてクラッカーを使つ
なよ？

一応ノックをするよつて言つてあるがな。

間違つた奴は口の中に爆竹詰め込んでクラッckerの代わりをしても
らひつい。

「……………アンタなら本氣でやりそつだから手に負えないわ

廊下から足音が響いてくるたびに教室に緊張が走る。

龍斗達はまだ来ない。

達也から連絡が来て既に5分が経っている。
屋上からこの教室まで大体5～6分くらいしか掛からないからそろ
そろ来るはずだ。

廊下でイチャイチャし過ぎて遅れているという考えたく
もない可能性もあるがな。

教室の扉がノックされて達也が入ってきた。
よしきちんと取り決めは守ったな。ノックもせずに言っていたら
殴り飛ばしているところだ。

教室にいた奴らからは安堵のため息が出ている。

「俺が言つたことは冗談だったのにな。さすがに遊びでやつて良い
ことないことの区別くらにはつくぞ」

「それが分かつていてもやつそつだと思われてるのがあんたなのよ
普段の行動から考へるとそう思われても仕方ないな。
まあ、今はそんなことはどうでもいい。どうやらメインの2人が來
たようだ。

クラッカーを構える。

教室の扉の窓に2人の影が映り、扉が開いた。

その瞬間総数40個の改造クラッカーが炸裂し、通常の2倍の炸裂
音と追加された紙吹雪が2人を出迎える。

予想外の出来事に2人とも呆気にとられて立ちすくんでいるのが笑
えるな。

紙吹雪が全て床に落ち、2人が正氣に返りうとした瞬間

『おめでとーー!』

クラスメイト全員からの祝福の言葉が教室に響き、そして沈黙が訪れた。

誰も一言もしゃべらない。祝福された2人は再び凍りついたように動かなくなり、クラスメイト達はそんな2人の様子をただ眺めていた。

そんな時間が少しの間続き、沈黙は破られた。

「「みんな…………ありがとう!」」

2人は涙を流しながら感謝の言葉を言い、それを聞いたクラスメイト達が2人に近づき各自の祝福の言葉を言っている。

さてその間に最後の仕込みをするとするか。
教室の窓を開け風が教室を通る様にする。

そして床においていたくす玉を教壇の上に立ち天井からぶら下げる。

「さて、クラスメイトの諸君、そのくらいしておきたまえ。2人にはこのくす玉を割つてもらわねばならないのだ!!」

そう言つて、2人をくす玉の下に連れて行き、くす玉から垂れている紐を掴ませる。

「海斗、俺の為にここまでしてくれるなんて本当に嬉しいぞ」「うん、海斗君、私の相談に乗つてくれたり、告白する勇気をくれたりしたこと本当に感謝してるよ」

「別に俺がやりたいからやつただけだ」

俺の言葉を照れ隠しかなんかだと思ったのだろう。

2人とも暖かい目で俺を見ている。畜生、そんな目で見るな。

笑ってしまいそうになるだろ？！

必死ににやけそになる顔をポーカーフェイスに保とうとするが、
駄目だ。

どうしてもにやけてしまつ。

その顔を見られないように顔を2人から背ける。

「海斗、アンタも照れることがあるのね」

バーニングスがなんか言つてゐるが無視だ。

「よしそれじゃ紐を引くか

「うん」

紐が引かれ、くす玉が割れる。

そしてその中から溢れたのは大量の紙吹雪、窓を開けておいたおかげでそれが綺麗に舞つてゐる。

こつそりと教室の出口に近づく。

それを見たクラスメイト達は一齊に拍手の音を鳴り響かせ、教壇の2人は再び涙を流して喜んでいた。

見回してみるとクラスメイトの一部も泣いている。

達也、お前龍斗を妬んでた癖に号泣するとは何て涙もろいんだ。

感動的な場面だ。

だが、それも長く続くことはない。
ビーフやらクラスメイトの一人が気がついたようだ。

「あれ、この紙吹雪なんか文章が書いてあるだ

その言葉に他のクラスメイト達も床に落ちた紙吹雪から文章が書いてあるものを拾い上げ始める。

よし、達也やれ！！

達也が文章の書いてある紙吹雪を拾い上げた瞬間に合図を送る。奴の顔にも満面の笑みが浮かんでいる。

うむ、感謝するがいい。

「『君は僕のお円さま。君、止めろ……』」

達也の言葉の途中で何を言つて居るかが分かったのだ。龍斗が割り込んできた。

その顔は顔が面白いくらいに真っ青に染まっていた。

「達也……お前、それは……」

信じられないところ思いが籠ったその声は震えていた。

「ナリだよ。これは龍斗作の月村さんへの思いを綴ったボエムだ！」

教室が騒然となり、次の瞬間殆どの者が手に持つた紙吹雪に書かれた内容を教えあっている。

ふふふ、俺がリア充野郎になつたお前をただ祝う訳がないだろ？が！！

さて逃げるか、グダグダしてるとバーニングスに処刑される。

「あつ！ 海斗！ あんた逃げんじゃないわよ！…！」

バーニングスが逃げる俺に気づいたようだが、既に遅いわ！！
行く手を塞げるならともかく、足の速さと持久力はサッカーやって
いる俺の方が上だ。
このまま逃げ切つてやるぜ！

問題は靴箱だな。

あそこではどうしても止まらないといけないから、そこまで行く間に
にどれだけ距離を離せるかが勝負になる。

教室を飛び出し、走り始める。

俺が最後に見た教室の様子は修羅場つてる龍斗と鬼の形相で達也を
蹂躪し終え、こちらに向かつて走つてくるバーニングスの様子だった。

…………もしかして、捕まつたらおれに死ぬのかな？

俺はリアル鬼ごっこを逃げ切った。

うん、本当にあればリアル鬼ごっこだった。

鬼のような形相をしたバーニングスに追いかけられた俺が言つんだから間違いない。

でも逃げ切った後で気がついたけど、これって何の解決にもなつてないんだよな。どうせ月曜になつたら学校に行かないといけないから、バーニングスに合う羽目になる。

うちの家族は悪戯とかする分にはある程度理解があるんだけど、学校を休んだり宿題やらなかつたりしたらすっげえ怒られるんだよなー。

1日目がおかることでバーニングスの頭が冷えるのを期待するか。どうせ龍斗と多村が別れることなんてありえないし、というよりあの作戦そのものに多村が関わってるしな。

つーか、今まで待たされたお返しとして龍斗の弱みを握つて尻に敷きたいとか多村も大概だよなー。

多村、いいがでじてやつたんだからフォローバックをしたとして
れよ？

俺もできる限りバーングスの「機嫌取りはするつもりだけれど、
それにも限度があるんだからな。

綺麗な宝石拾つたり

今日は日曜日俺と龍斗、達也にとってはサッカーの日だ。
多村にとつてはサッカーマネージャーの日。

そつそのはずだ。

そのはずなんだ!!

だといつのに田の前で繰り広げられている光景は何だ!??

いつの間にサッカーグラウンドはカップルがイチャイチャする場所
に変わったというのだ。

この糖度は監督の士郎さんが桃子さんとイチャついているとき並み
だぞ!!

ばかップル、周りを見てみる!!

お前達の甘ったるい空氣に当たられて碌に練習できないだらうが
!!

こんなときに限って士郎さんが遅れてくるとか最悪だ。

士郎さんをえいればこの2人のばかップル空間を破碎できるといふ
のに!!

昨日のポエムばら撒き事件が予想外に効いたのか、ラブ度が飛躍的に上昇して俺達の言葉ではびくともしやがらねえ。

「達也、俺が逃げた後何があったんだ。あの2人のラブ度が異常に

高くなっているんだが

「雨降つて地固まる、つて奴かな。正直あの馬鹿らしこへりに甘つたるい展開をもう想い出したくない。」これはあの後教室にいたみんなが同意見のはずだよ。痴話喧嘩は犬も食わないって本当なんだなと思ったよ

心底、嫌そうな顔してるな。

そこまで甘つたるい空間があの後繰り広げられたのか。
見てみたかったような気もするが見てたらあつとその空氣を全部にしようとしただけだろう。

我ながら自制のきかない性格をしているからなー。

刹那の快楽のためにとんでもないことでも平然とやってしまつただらうから、これで正解だったんだと思つてしよう。

「それにしても早く監督早く来ないかなー。やうしなこと俺達の気力がゴリゴリ削れるだけでもともな練習にならないと思つんだが」「もう一時間もリフティングばかりである。

「ダッシュも終わつたし、フォーメーションの練習とかは監督がいなことできなこいし、ほんとやることがないね」

本当に。

PKはキーパーがフルボッコになるから嫌がられるだらうしなー。
何か面白おかしい暇つぶし兼練習になることが無いだらうか、
…………思いついた。

「的当てをしよう」

「はつ？ 的なんてどこのあるの？」

その疑問は尤もだ。だがよく見ると、すぐそこには的にしたいものがあるだろうが。

俺が黙つて指差した先にはイチャついている2人

「ニヤニヤニヤ、やれはだぬだぬー。へ
ヒヨコたつた、ハジハシすんだよー。」

里香に当たらなかつたらOKな時点でお前も大概だな。

「ふんっ！ その程度のことには俺が対策を取つてないとでも思つて
いるのか？」
だとしたらお前には失望したよ

大げさに肩をすくめて呆れた振りをしてみる。
やつてみたかつたんだよなこれ。

「なに? 何か確実な作戦があるとでも言つのか?」

食い付いたな。

だがそんなに身を乗り出してくるな。男の顔のどアップなんぞ見た
くない。

「 もののんだとも、いいか？ 村に這入つてしまつたの監督に殺され、龍斗からは絶交されるだろ？」

「改めてそう言われるとリスクの大きさが分かるな」

本当に。

龍斗との絶交は俺にとってわけど痛手ではないが、監督を怒りせるのは避けたい。

監督から家族この約定のこと云わつたら最悪だ。

「ああ、だがそのリスクを回避できる方法がある。しかも的にされた龍斗からさえ感謝される上に監督の追及からも逃れることができ最高のプランだ」

「……そんなものが本当に実在するのか？ 海斗がハーレムを築くべりい非現実なことだと思つんだが」

我慢だ我慢するんだ、俺。

ここで怒つても何にもならない。後で監督に怒られるだけだ。
復讐はばれないよつにこつそつとそれが基本だ。

だからこの場では何もしないが、覚えていろよ達也、この恨みは忘れんぞ。

「……ああ、俺達がやることまとも簡単だ。約定をしながらこうこうだけでいい。

『やべつー 龍斗！ ボールが多村の方に飛んで行った

ただそつこうだけだ。そつすれば龍斗が身を挺して多村を庇うだろう

う

「…………

うむ、俺の完璧な作戦に声もないようだな。

俺自身、こんな完璧な作戦を考えた俺が恐ろしくへりいだからな。
無理もない。

「海斗、君は僕の想像以上の外道だつたようだね」

「失礼な。いいか？　この作戦は旨を幸福にする！　まず幸福になるのは的当てをして、あの甘つたるい空気をぶち壊し、その元凶に復讐できた俺達、これは問題ないな？」

『ああ、そこに異論はない』

周りには翠屋っFCのメンバーが集まつてきいていた。
お前たちはいつの間に集まつてきた。

さつきまであつちこつちで好き勝手にやつてただらうに、あれが幸福の匂いをかぎ取る嗅覚でもあるのか？

「そしてこの作戦は驚くべきことに的になつた2人をも幸福にする。いいか諸君、よく考えるんだ。俺達が多村に向かつてボールを蹴りそれを龍斗に伝える。そうすれば当然ながら龍斗は多村を庇い、庇われた多村は益々、龍斗に惚れるという寸法だ。終わつた後に龍斗にそのことを伝えれば何にも問題は起こらない。むしろ俺達を庇つてくれるだらう」

「おお～～～」
「それ完璧じゃね」
「龍斗、さすがだ！」
「抱いてくれ……！」

最後の奴も的にじよう。
うんそじよう。

「それでは行くぞ……！」

『 むむむ む――――――.』

さすがに10人以上の人間が一斉にボールを蹴つたら龍斗でもカバ
ーしきれないということで、2人ずつやることになった。

念の為のフォロー要員も準備した。
これで万が一の事故も起こらない。

「ねえ、海斗、フォロー要員って何するの？」

無視だ無視。

おっ、始めるようだな。記念すべき1蹴り目だ、見逃すわけにはい
かない。

「無視、無視なのか！？」

「背番号12番」「背番号13番」

「行きます！..」

2人の蹴つたボールはそこそこ鋭い軌跡を描きながら一直線に2人
に向かっていく。

「「龍斗！ ボールがそっちに行つた。気をつけろ！..」」

「えつ？」

馬鹿者が！！

わざわざ多村を庇え！

そいつ思つたが既に遅い。

ボールは多村に直撃コースな上に龍斗は固まつて動けない。
直撃する。

誰もがそいつ思つたはずだ。

だが皆の衆よ。俺がここの程度のイレギュラーに備えていないとでも
思つたか？

「いけ達也よーーー！」

「は？」

達也を思いっきり突き飛ばし、ボールと多村の間に割り込ませる。

鈍い音が響いた。

後に残つたのは何とも言えない空氣、皆の視線は顔面と腹にボール
の直撃を受けて倒れ伏した達也に注がれたいた。

「ナイスだ達也。お前の献身のおかげで怪我人が出なくて済んだ」

「海斗！ 習つてやつは」「だから気絶したふりをしておけ」

足元にあつたボールを達也田掛けて蹴り飛ばす。

頭部にクリーンヒット！

うむ、ナイスだ俺。そして優しいぞ俺。

なにせ頭を直接蹴らなかつたからな！

完全に沈黙した達也を引きずり^{2人}的の傍からどかす。

「お氣にせざどうぞー」

「うつ、うん」

「…次こそは里香を護るんだ」

よし、次は龍斗が反応できないということはないだろう。
それにもしても、今の惨劇から10秒と経たずにイチャイチャを再開
するとはバカツブル侮りがたし！！
もしかすると俺以上に常識が浸食されているのではなかろうか？

「次、背番号16番、60番行け！ チャンスは1人1回だけだぞ、
外すなよ？」

「「おおおおお————！」」

気合の入つたいい返事だ。

だが蹴られたボールは見ているこつちがビックるするくらいへろへ
ろでスピードが無かつた。

当然ボールは2人まで届くことなく力なく地面に転がつた。

その後も龍斗にボールを直撃させることができる奴は現れなかつた。

そもそも狙いが逸れて話にならない奴、狙いは正確でもシューート力が全く足りない奴ばかりだった。

うちのクラブのレベルはここまで低かったのか！？

PKのような状況で！

むしろ的の方が当たりに来てくれているこの状況で！

1発も龍斗に当てることができないと！！

「…………お前らには失望したよ。あれだけ当てやすい的に1発も当てることができないなんてな！」

「…………いや、だつて、当たつたら痛そうだし……」

「何を今さら、そんなことは最初から分かっていたらいい」

「いやいや、人の不幸を想像していい気味だと思うのと、人を不幸にしていい気味だと思うのは別物だよ」

いつの間に復活したんだ達也、結構本気でボールを蹴り込んだからもう起き上がりてくるとは思ってなかつたんだか。
まあ、どうでもいいかそんなことは

「確かにそうだな。俺も想像の中の不幸より、目の前で起きている不幸の方が楽しめるからな。そう考えると確かに別物だよな」

達也にしてはまともなことを言つた。

頭打たれてまともになつたか？

「…………なんか失礼なこと考へてるみたいだろうけど、予想以上に君は最悪な人間だつたんだね。見てみなよ、みんな引いてるよ

おいおい、今さらその反応はないだろ？

俺は今まで欲望に忠実に行動してきた今さらそんな反応される理由はないはずだ。というのは俺の価値観で一般人の皆さん的には越えてはいけない一線を今回のことには越えたんだろ？

おかしいなー。

今回これはみんなが幸福になるのに、どう辺が駄目だったんだらつか？

全く分からん。

分からんから今はその疑問は放つておこう。

今はそんなことを考えずに的当てに専念しよう。

龍斗の期待に応えるためにもな。

「まつ、そんなことはどうでもこー。達也、とつは俺とお前で締めるやつ」

「君って本当に自分中心で動いてるよね……

達也は呆れた様な顔でこちらを見ているが

「そんなことは当たり前だろ？ まず自分が楽しくなるように動くんだよ。そしたら俺の行動に乗ってくれる同類が1人2人は見つかるからな」

「それって、僕が君の同類だって聞こえるんだけど？」

そんなに嫌そうな顔をするなよ。

傷つくだろうが。

「実際、そうだろ？」

「まあね。それは否定し切れないと」

照れ屋さんめ。

素直に認めれば楽になるものを。

「まあ無駄話はここまでにして行くか？」

「そうだね。そろそろ監督も来るかもしけないし、急いでつか

「背番号2番、内田達也、行きます！」

達也の奴、うだうだ言つてたけど結局本気でいくのな。
奴の蹴ったボールは強烈なスピンドルがかかる。

蹴った瞬間の軌道こそ2人には当たらぬように見えるが徐々に軌道を変え直撃コースに近くなっていく。

はじめの方はまた外れるのかと油断していた龍斗の顔が焦りの感情に包まれる。

なにせ、龍斗が気づいた時には既にボールは多村から5メートルもないところに来ていた。

奴は焦って、多村を庇うように前に出る。

よしー

これで的当てが初めて成功する！

そう思つたのは俺だけではなかつたはずだ。
だが、その予想は裏切られた。

ボールは大きくカーブし、多村への直撃コースに入った。

入ったんだが当然ながらそこでカーブが突然止まるというようなこともなくそのまま曲がり続けて2人に当たらず逸れていった。

「達也、弁明は？」

「ちょっとカーブをかけ過ぎた」

「んな」とは見たらわかる！ そんなことよりこの何とも言えない空気に対する弁明を聞いているんだ！！」

皆が皆、直撃すると思つて身構えていたのに最後の最後でこのどんでん返しだ。

「見ろ！ 龍斗なんか多村の不思議そうな視線を受けて死にそうな顔になつてるじゃねーか！ お前は本当に翠屋JFCのストライカーの一人か！？」

「いや、だつてあれでしょ。僕はさ、テクニック技の達也なんて言われてるんだよ。だつたらこうこうでも技術を見せつけなきゃと思うつじやないか」

『自意識過剰だ――！』

誰もお前をそんなかつける一つ名で呼んでねえよとか。
ああ、やっぱり唯一の常識人だと思つてた達也も結局は同類なんだ、とかいひ絶望の声が溢れた。

「…………まあいい。いや、よくはないが終わったことをどうに

「言つてもしようがない。だから俺がこの空氣をぶち壊す。」

『ああ～～～～～！』

ボールを地面に置き助走をつけるために少し後ろに下がる。

俺は小細工なんぞに頼らない。

俺が蹴るのは最高のスピードボールだ！

5メートルほどの助走をつけ、そこで得たスピードを全てボールに込めるつもりで思いつきり蹴り飛ばす。

完璧だ！！

コースは完璧に多村に直撃コース。
スピードも申し分ない……といつか少々強過ぎるくらいはある。
わざとだけどな。

「多村！ そつちにボールがいった。気をつけろ……」

よしこれで準備は整った。
龍斗やるんだ！

ボールから多村を庇う為に龍斗がボールに背を向けて割り込む。
その次の瞬間龍斗にボールが直撃する。

『ああ～～～～～！』

そこまでは皆の予想通りだつたのだろう。ついか自分がやるんじゃなくて人がやるのを見る分にはお前らの良心は痛まないのか？

だがそこからが違つた。

『おおーーーーーーーーーーーー』

俺の強烈なショートは龍斗を倒したのだ。
龍斗が庇つた多村だと。

出来あがつたのは多村を押し倒す龍斗という構図、いやー最近の小学生は進んでるなー。

野次馬しようつか野次馬。

おおー、2人とも真っ赤になっちゃって初々しいなー。
ところが龍斗の手が多村の胸を掴んでるのは俺の田の錯覚じゃないんだらうなー。

まあ、小学3年生の胸に興味の無い俺は後でからかいのネタが増えたなと思つくらいだが、その光景を見ている他の奴らからは殺氣が漏れてくるのを感じる。

野郎の嫉妬は見苦しいぞ。

女の嫉妬は恐ろしいか鬱陶しいかのどちらかだけどな。

まあ、傍から見る分には楽しめるのが男の嫉妬と違つてるがな。
男の嫉妬はどうしようもないくらい見苦しいのにはかわりがない。

ミッショーンコンプロートだ。

いい暇つぶしになつた。

「それでこれはどういう状況なんだ？ 龍斗、君が説明してくれるんだらうへー。」

ああー、Jのタイミングできましたか、土郎さん！

「説明しましょ。俺たちは恋のキューピッドをしていたんです。あれを見てくださいあれが俺達の成果です」

「まだに監督が来たことにも気がつかず、真っ赤になつて思考停止している2人を指さす。

だが俺は選択肢を誤つてしまつた。

「確かに、初々しくていい感じだな。俺と桃子もあんな

だから待つてるのは地獄のストロベリー空間発生技、その名も『
惣氣』

全速力で離れようとするが、それよりも士郎さんが俺の肩を掴む方が早かつた。

逃げられない。

ならばと達也達を巻き込もうとするも既に奴らは俺から距離を取つていた。

攻撃を分散させることもできないだと…?

俺このまま廃人になんのかなー。

「どうわけで、来週の日曜日は他のチームと試合だ。体調を崩さないように気をつけめりに。では、解散！」

「海斗、高町監督の惣氣はとっくに終わってるよ。いい加減正気に

戻りなよ

そんなことを言えるのはお前が1対1で士郎さんの惣氣を聞かされたことがないからだ。と声を大にして言いたいが、そんな気力すらもアリはしない。

くそつ！

惣氣は最強の精神攻撃だな。

「おおつと、言い忘れたが海斗君は残つてくれ、話したいことがある」

「この世に神はない！

……少なくとも幸運の女神などと言つものはな。

「そんなに絶望に染まり切つた顔しなくても大丈夫じゃないか？さすがに監督もわざわざ惣氣の為にお前を呼びとめる」とはない……ないと信じたいなあ……」

自分が信じ切れないなら言つなよ。余計に鬱になるだらうが。

「…………逝つてくる」

「逝つて来い」

「さて、海斗、君を呼んだのはなのさの」と聞くたことがあるからだ

おー、この人も親馬鹿だからなー。

最近様子がおかしい高町のことが気になりてしょうがないのだらう。その割には放任主義といつか子供の意志に干渉するようなことはほとんどしないけどな。

「あれですか最近なんか上の空の様子だつたり、なんでそんなとこに居んの? と思つよつなどこに居たりする」とのとことですか?」

「やのことだ。今のところ命に關わるよつなことにはなつていなが万が一とこいつを考へておかないとけなからな」

普通命に關わるよつなことにせてもそも関わらせないか、關わらつとしたら無理にでも止めるんだと思つけど、高町家に常識は通じないからな。

「俺が知つてこる」とは学校でも上の空になることが多いことと、そのせいでバーニングスの機嫌がだんだん悪くなつてきてこるとこつことくらいですね。といつか俺なんかに聞かなくとも士郎さんならなのはの後をつけければ簡単に何してるか分かると思つんですが?」

この人のスペックは異常なのだ。

なんかこの人だけ漫畫の中から飛び出してきたといわれても納得してしまつくりこに

だからなんでこんな回つてビtocitoしてこるのか分からぬ。

「そんなストーカーまがいのことを桃子が許してくれぬばずがないだろ?」

「…やうですか」

頼むからまた惚氣話にならないでくれよ。

「やうか、知らないか。君ならもしかしたら知つてゐるかと思つたんだけどな」

惚氣話にならなかつた。

よかつた。

本当によかつた。

「知らないものは知りませんよ。それに学校ではあまり高町と話しませんしね」

「ああ、やうみたいだね。なほはがそのことで文句を言つてたのを覚えてるよ。あれかい女の子と話すのが恥ずかしい年じゃかい?」

「いやそんなんじやないですよ。ただ高町と話していのよつ龍斗とか達也とかと話してる方が楽しいだけですよ」

「……………そつか」

あれ?

なんか不味いこと言つたか?

「ああ……」

これつて高町と話すのが楽しくないと言つてゐるようなもんなんだな。

だけど実際、高町は良い子過ぎて話が合わないしなー。

からかう分には面白いんだけどな。

それにしてたってバーニングスのシンデレ具备合には及ばないんだよなー。
なんというか全体的にキャラが立つてないというか。

小学3年生でキャラが立ってる、立っていないとか囁きのほかに気がするがな。

まあそんなことより弁明だ弁明。

親馬鹿の土郎さんに娘のことを馬鹿にするようなことを囁いてしまつたんだ。

なんとか言い訳しないと物理的な制裁処置が発動しかねない。

「ええっと、あれですよ。あれ！ 高町はいい子だから俺みたいな奴とは話が合わないんですよー！」

「……良い子、か……」

あれ？

もしかして別の地雷踏んだか？？？

「確かにのはは良い子だ。あのかわいい容姿に加え、相手のことを見いやる優しい心を持っている。だが、私たち家族に頼つてくれないんだよなあ。良い子であろうとし過ぎて家族に迷惑がかかることを極端に嫌がっているんだ」

ああ、それは分かる。

高町は少しでも他人に迷惑がかかることだと途端にどんなに自分がしたいことでも止める傾向があるからな。

良い子であろうとし過ぎて子供らしさが無いんだよな。

それで一緒に馬鹿をやり難いから学校じやあんまり話さないんだよな。

「私達も頼つて良いんだぞと背中で示しているんだがな。中々頼つてくれない」

「直接言つてみたらどうですか？ さすがにそうすれば高町も我儘を言つやすくなると思つたのですが」

背中で語る男つてのは格好いいが言葉にしなきゃ伝わらないことの方が多いからな。

「『困つたことがあれば遠慮なく頼りなさい』と言つたこともある。だが、それでも効果が無かつたから困つてゐるんだよ。特に今夜は夜どこかに一人で出かける」ともかくようだからなおむしら心配なんだよ

言つても効果が無かつたのか、それだと俺に出来るアドバイスはもうないな。

楽観的に考えれば、今回のことば人に頼らなくともどうにかなる程度のことだから高町が頼つてこない、とも考えられるけど、逆に悲観的に考えると家族程度に話してもどうにもならない様なことになつてゐかもしぬれいんだよな。

「そうですか。すいませんが俺に出来るアドバイスはもうないです

「いや、すまなかつたね。なのはと同い年の君にこんな話をしまつて、お詫びに今度家に来た時に何かサービスしてあげようか？」

「ありがとうございます！ その時はぜひショーケースをサービスしてください……」

「食い付きが良いなー。分かつたよ、今度來た時はショーケースをサービスしてあげよ。それじゃ、呼び止めて悪かつたね。さよなら

「わよなうです、士郎さん」

さて帰るとしよう。

それにも話を聞くだけでショークリームが手に入るとは今日は良い日だ。

夕焼けに染まる川の土手沿いを歩きながらこの後の予定を考える。さて、この後は家に帰つて宿題して寝るだけ…………じゃないな。バーニングスの機嫌が治つていることを祈りながら、どうぞ機嫌となるか考えないといけないな。

まず思いついた方法は食べ物で釣ることだ。

丁度士朗さんからシュークリームをサービスしてもらふることになつてゐるから、それを利用すれば俺の財布のダメージは低く抑えられるはずだ。

欠点としてはこの頃食べてなかつた翠屋のショークリームを食べることができないことだな。

あの超絶的に美味しいショークリームを食べる」とができないのは痛い。

他に何か手はないものか…………ふむ、思いついたぞ。

近所のおばさん達を参考にすればなんかのブランドバックをあげればよさそうなものなんだが、さすがに歳が離れていて参考にはならないか？

いや、それ以前にそんなものを買つお金はどうするかという問題があるな。

そこいら辺に札束でも落ちてないかなー。

ありもしない希望に向けて土手を少し探索してみた。

もちろん札束なんぞ見つからなかつた。

ただ、代わりにバーニングスの機嫌をとれそなものが見つかつた。
あつたのは青い宝石のよつな物。

着いていた土を払つて夕日にかざしてみると綺麗に光つた。
不思議な光を放つていて、母親のネックレスについているサファイア
アよりも大きいし、光り方も違う。

女でただで宝石を貰えることを喜ばない奴はないだひつ。
ご機嫌取りの方法はこれにするか。

そつ思つて青い宝石をポケットに入れる。

本当に今日は良い日だ。

二度あることは三度あるから三度目の幸運に期待だ!!

「すいません。そつき貴方が拾つたものを渡してくれませんか?」

突然かけられた声、それは聞いたことの無い女の子のもので、振りかえつた先にいたその女の子は夕日を背に立つっていた。

「.....」

声が出ない。

美しい美し過ぎる。

長い金髪が風に揺れながら夕日を受けているその姿は神々しいほどに綺麗だった。

「あのー、すいません言葉は通じてますか?バルディツ
シユ、翻訳魔法はちゃんと発動してるよね?」

『 yes -sir』

「 ならどうしてなんの反応もしてくれないんだね？？？」

何言ひてんのかは分からぬけど小声で手に持つた鎌（？）みたい
なと話してゐる。

服装もなんか変な感じのものだし、もしかしていやつは俺の同類オタクな
のか？

……いやまた、冷静になれ。

わっせわっせと流したが、鎌と話してゐるのはおかしい。
鎌にバルティックシユとか名前を付けるのは俺たちオタクならよくあ
ることだ。

5歩くらい譲つてその鎌に話かけることもあるかもしない。
だけど、鎌が話すなんてことはあり得ない。
少なくとも俺の知つてゐる常識の中では。

……ところとはこれは非日常のイベントなのか？

上手くいつたら血肉躍る冒険の世界に旅立つことができるのか！？

そうだ、わざとわざに違いない。

ボーリミーシガールで始まる物語なんて腐るほどあるからな。
これがわざでもおかしくないはずだ！！

だとしたら第一印象が良いにこしたことはない。

既にちよつと無視してしまつてゐるのがマイナスポイントだがこれ

「へりこなら挽回できるさあだ。」

「「じめん、粗があんまりに綺麗なんで見惚れただんだ。本当に夕日を背に立っている君の姿は神々しくへりこに綺麗なんだよ」

相手に気に入られようと/oお世辞を言つ時のポイントの一つは嘘を言わないことだ。

本当のこと（少なくとも自分がそつ脱つてこな）ことを隠せば、そこには演技じゃない本物の感情が籠る。

そうなれば聞いている相手の心にその言葉が届き易くなる、と母が言つていた。

女優やつている母の言葉だ。信憑性はかなり高い。

現に俺の言葉に顔を真っ赤にしている金髪の少女がいる。
そんな姿も可愛いなー。

「ええっと、「じめん。ちゅうと本心が出ただけだから気にしないで、それでわざわざ拾つたものってこの青い圭石のこと?」

わざわざなく、嘘じやなつてことアピールして少しでも好感度を稼ぐのだ!

「…………うへ、うふ、やうだよ。その圭石はジュエルシードって言って私の探してくるものなんだ。渡してくれないかな?」

「わーーー!」

そんなに可愛らしく小首を傾げるなー!・

思わず苦笑したくなつたじやないか!!

初対面で告白とか失敗する以外の結末が思い浮かばない。

それでも告白したいと思わせるこの威力は恐ろしいものがある。

「渡してくれてありがとう。それじゃ、バイバイ」

そんな言葉を残してどこかに飛んで行った少女。

あれ？

あれ？

俺は宝石を渡した覚えなんてないんだが、なぜか手が少女の居た方に出ていてポケットが心なしか軽くなってる気がする。

ははははっ、まさかね、まさか無意識のうちに渡したなんてことはないだろ？

そう思いたかったのに、ポケットに入れた手が宝石を握むことはなかつた。

マジか…………マジでか！？

「糞つたれ————！」

名前すら聞いてないぞ！

それじゃ探しよるもないじゃないか！？

いやまた、金髪の少女、しかも赤色の眼、これは日本ではかなり特徴的だ。

それにはただ可愛いんだ。

聞き込みをすればもしかしたら手掛けりが見つかるかもしれない。

ポジティブに考えるんだポジティブに、ネガティブに考えてもテンションが落ちるだけだ。

そつと決めれば行動あるのみだ！

手掛けりなしだった。

まあ、河川敷から家に帰るまでに会つた人に手当たり次第に聞いただけだから、しょうがないのかもしれない。

問題はそのせいで帰るのが遅くなつて、熱々のハンバーグを食べ損ねたことだ。

冷えたハンバーグはそこそこしか美味しくなかつた。

姉にも金髪で赤い目をした女の子を知らないかと聞いてみたが、心当たりはないということだった。

「なに？ その女の子に惚れでもしたの？」

と言つて姉がからかつてきたから

「そうだ！」

と答えておいた。

その少女を探している本当の理由はそれではなく、面白そうだからだが、一応一目惚れしたのも事実だから嘘ではない。

それに惚れたということにしておけば、より積極的に俺の手伝いをしてくれるかもしれないし、言い訳も簡単になる。

その後家族会議が開かれていた様だが、内容は知らない。

想像はつくがな。

そのせいで姉以外に話を聞くことができなかつたけれど、まあ家族なんだし明日の朝にでも聞けばいいかな。

「それではただいまより緊急家族会議を始めます」

「さつさと始めなさい。」いつちは仕事がやつと終わつたばかりで早く寝たいのよ

母さん、この話を聞けば眠気なんて吹き飛びますよ。

「議題は何と海斗の初恋相手についてです！」

「「「「「なにー?」」」」

うん、その反応分かるわ。

あの海斗が現実の人間に恋するなんて私達にとつては青天の霹靂以外のなんでもないからね！

「情報源は確かなのか？ ガセだつたりしないか？」

「ふつ、」この情報の確度は確かよ。なにせ本人が認めたからね

「「「「あー」」」」

「何、何なのー?」

急にトーンシヨン落とれなこでよー。

「それじゃあ、海斗の嘘の可能性が高いわね」

「わ、わ、じやな、姉のお前が家族会議を開いて」」」馬鹿な発言をするのを見込んだ嘘じやうつな」

「わ、せんははずはないわ
……なければいいな
……ないはずよ
……

駄目だ。

考えれば考えるほど海斗の言葉が嘘にしてしか思えなくなつてへる。

「話はそれだけ? それじゃあ今回の家族会議は」」」終わつこしましょ。解散」

みんな、わざわざ腰を立つて自分の部屋に戻つていぐ。

海斗、怨むわよ。

再会への手掛かり

次の日の朝食の時に姉以外の家族に聞いてみたけど心当たりはないようだつた。

「その女の子に惚れたの？」

と聞いてきた母に、姉の時と同じよつて

「もうだ！」

と答えたたら、なにやら騒然となつて昨日の夜に続き再び家族会議やつてた。

会議に参加しようとしたら

「海斗は参加禁止だ」

と父から言われてしまつた。

まあ内容が内容だろうからしじうがないとも思わないわけでもないが、参加できなかつたことは面白くないので、お返しとしてリビングの時計の針を10分ほど遅らせておいた。

「なんで私が言つた時は信用されないのよ……」

なにやら魂の籠つた叫びが聞こえたが無視しよう。

さて学校でも聞き込みをするか。

忘れてた。

マジで完璧に忘れてた。

バーニングスの機嫌を取ることを…！

俺がそのことを思い出したのはバーニングスが校門で俺を待ち構えて
いる姿を見て、なんか言つてゐるのを無視した挙句、横を通り過ぎた
後だった。

まずいよなー。

これってかなりまずいよなー。

振り向くのが怖い。

さつきまで何か言つてたのに急に黙つてしまつてゐるからなおさら
だ。

殴られるかなー、殴られないといいなー。

逃げたいけどどうせ逃げても教室同じだし、マジでどうじゅう。

1、土下座して謝る。

2、1日中何とかして逃げ切る。

3、翠屋のシュークリームで許してもらひ。

ぱつと思いつくのはこれくらいか?

セトヒウシヨ「海斗、セツセツトシハ向きなさこよ」……考へる時間もないのか。

振り向いた先にはもちろんながらバーニングスと月村、高町、そして野次馬が多数と言つたところだ。
こりや完全に見せ物になつてゐるな。
…………」の状況を利用するか。

「バーニングスさん、無視してすいませんでした。何か用でしょうか？」

まずは腰を低くして聞いてみる。
相手の機嫌をとるときの基本だ。

「アンタがそんな話し方をしても気持ち悪いだけだわ。いつもの話
し方に戻しなさい」

酷い言われようだ。

効果がないどころか逆効果なようだ。

失点1と言つたところか？

しかし、俺もいつも偉そうな話し方をしているわけではないんだが、
イメージと違つものは恐ろしいな。

「じゃあ、お言葉に甘える。バーニングス、何か用か？」

「ええ、土曜の件よ。あれの舞台裏を里香から聞いてね。一応謝つ
ておひつかと思ったのよ」

おおーー！

多村ナイスフォローだ！

これでバーニングスに翠屋のショーケースをおじらなくて済むぞ。

「謝るなら頭を下げるどうかね？」

……あれ？

口が勝手に動いたぞ。

「最初の方こそしおらしかったけど、怒られないと分かった瞬間態度が大きくなつたなあいつ」

五月蠅いぞ野次馬。

だが言つてることは尤もだ。

我ながら態度の豹変具合に戸惑いすら覚える。

「…………悪かつたわね」

えつー？？

あのバーニングスが碌に反論もせずにこの俺に頭を下げただと…
信じられん。

写真を撮つておひや。

うむ、写真にも映るといつゝとはバーニングスが頭を下げたといつのは幻覚ではないということだ。
だとすると、顔を真っ赤にしてこけら飛びかかつてくるバーニングスもまた幻覚ではないといつゝなのだらう。
悪乗りが過ぎたな。

「海斗、またバーニングスにぼろ負けしたな」

「龍斗、つるやこちゃん」

「ヤニヤしながら話しかけてきやがって、そんなに俺の不幸が嬉しいか。覚えてるよ。

そのつち多村との修羅場を演出してやる。

「大体、バーニングスの戦闘力がおかしいんだ！ なんであそこまでこっちの攻撃が当たらないんだよ！？」

「まあそれは見ていてもそう思つたな。まるで次に攻撃がどこに来るか分かつてているかのように見事にお前の攻撃をかわしてたからな」

あれはどう考えても不自然極まりなかつた。

予知能力でも持つてているのかと思いたくなるレベルだつた。

「俺だつて何回も殴り合いのケンカをしたこともあるんだぞ！ しかも全戦全勝だつた！！ それなのにバーニングスには勝てない。なぜだ！？」

しかも写真まで撮つたのはやり過ぎだつたようで、結局バーニングスに翠屋のシュークリームをおこることになつた。

最悪だ。

「バニングスさんは君の天敵なんじゃない？ ほらカエルとヘビみたいにね」

「そんな結論は断じて認められない……」

そんな結論を認めるくらいならバニングスに純粋に実力で負けていふと考えた方がよほどました。

実力で負けているなら努力で何とかなる可能性があるけど、根本的に勝てない関係だったら逃げるしかなくなるからな。

「まあ、俺たちひとつてはお前がバニングスにぼろ負けしたことはどうでもいいんだ」

「どうでもよく『どうでもいいんだ』」

むつ、今回はなぜか異様に押しのが強いな。

というよりいつの間にか周りにはクラスの男子の大部分が集まっている。

いつたいなんだといふんだ。

「でつ、海斗よ。お前はバニングスに惚れてるのか？」

「は？」

いきなり何言つてんだこいつは、そつか馬鹿なんだな。

「おいおい、海斗、そんな憐れむような目で見るなよ」

「それじゃ嘲笑えばいいのか？」

「バーニングス様を『アート』に誘つたくせに」

何言つてんだクラスメイトAよ。

「どうかクラスメイトAよ。貴様はバーニングスが好きなのか？Mなのか？」

「まあ、そいつが言つたことが俺達がこうしてお前のところに集まつている理由だ」

「あれが『デート』に誘つているように見えたのか？ もしそうなら精神病院に行くことを勧めるぞ？」

確かにバーニングスとは翠屋と一緒にショークリームを食べに行く約束をしたが、別に2人きりという訳でもないし、そもそもぼこぼこにされていた俺がその場から逃れるために言つたのは俺とバーニングスの乱闘を見ていたことなら分かると思つんだが？

「確かにあれは『デート』に誘つているようには見えなかつた。だが、結果としては『デート』をするんだ。だから一応聞いて置かなければならぬからな。なにせ聖祥大付属小学校の三大美少女の1人だからなバーニングスは」

「あー、アイドルに虫がつかないか心配してるファンなんだなお前たちは」

馬鹿らしいが納得がいった。

確かにバーニングスは基本的にいい奴だしな。

それを見た目もいい、将来は凄い美人になるだろ？。

俺みたいに馬鹿をやる奴には尋常じゃなく厳しいがな。

「別に『バーニングス様を護る会』ではバーニングス様に彼氏ができる」とは否定しない

おお、珍しいな。

だがそれなら俺がバーニングスをデートに誘おうがキスをしようが関係ないとと思うんだがな。

「だが！　お前のよくな悪い虫がついては許すことはできない！」

「俺は悪い虫扱いか

苦笑するしかないな。否定もできんがな。

「当然だ。むしろ悪い虫扱い程度では生ぬるいくらいと思っているんだが、お前は女の子を泣かせた実績はないからな。それ以上ランクダウンはされていない」

面白いことやつてんなー、じこつらむ。

俺も混ざりたいと思わないでもないが、今の俺にはバーニングスより綺麗なやつを知っているからな。

混ざつても確実に浮くことになるだろ？。

「やうか、お勤め御苦労をまだな。それで、俺がバーニングスに惚れてこるかという質問だが、生憎俺はバーニングスに惚れてなどいない

いじり甲斐のある奴だとは思つてゐるがどな。

「やつぱりな

「そうだよな

周りに集まつていた奴らが口々にそう言いながらそれぞれの席に帰つて行こうとするが、その前に聞きたいことがあるんだよ。

「おいおい待つてくれよ。俺が質問に答えたんだ。お前達も俺の質問に答えてくれ」

「なんだ？」

「金髪で赤い目をした黒い服の女の子を知らないか？」

『美少女か！？』

ハモんなよ、氣色悪い。

「美少女だ」

「待て記憶を探つてみる」

全員が一斉に唸りながら考える人のポーズを取り始めた。流行つてんのか？ そのポーズ。

『知らん！！』

だからハモんなよ。よし次ハモつたら殴り飛ばそう。

「そうか。それならいい」

「まてまてまて、俺たちはよくない。お前が女の子の話を自分から振るなんて異常事態が起きたのに俺達がたつたそれだけの説明で納得すると思うのか？」「

「納得しろ」

「嫌だ！」

全員殴り飛ばすとしよう。

しばりくお待ちください。しばりくお待すください。

お待たせした。

19人ばかり殴り飛ばすのに時間が掛かった。

「納得しろ。いいな？」

『嫌だ！』

ほほつ、まだ殴られたりないといふことか。

「また！ その振り上げた拳を下してくれ。俺達がその女の子について聞きたいことは一つしかないんだ。どうかこの質問にだけは答えてくれ」

ふむ、さすがに土下座してまでや被われては俺としても答えることはやぶさかではないぞ。

とこつかお前のプライドは随分と安いんだな、龍斗。

「いいだらう。質問は何だ？」

「ああ、それは何でお前がその女の子を探しているかだ。その理由次第では俺達の取るべき行動が大きく変わるからな」

そんなことか。

ここからは本心の理由の方を言ひておいた方がいいな。

帰るのが遅くなるのが遅くなつたときの言い訳として『一日惚れした少女を探してた』が使えるから、家族には惚れたという理由の方を話したが、こいつらには『面白いことになりそうな予感がしたら』という本当の理由を話した方がいいだろ？

「それはな、面白そうな予感がしたからだ」

『よし、これからは金髪で赤い目をした黒い服の女の子がいても見て見ぬ振りをしよう』

こいつらはいつも行動を取ることが分かり切つていたからな。俺が今まで積み上げてきた実績の結果だ。

俺の面白そうな予感に関わると碌なことが無いのをみんな十二分に知っているから、絶対に関わってこないだろ？

よし、これで面白いイベントを一人占めできる可能性が上がった。後は無事にあの女の子を見つけるだけだな。

見つからない。

この一週間出来る限りの方法を使って探し回つたが、一向に見つか

る気配がない。

あんな美少女でさうに金髪といつ田立つ姿なのに田撃情報すり全くない。

おかしい、おかし過ぎる。あれか、非日常系の何か不思議な力が働いていて一般人には見つけられないのか？

「…………っ、…………いっ、おこっ、海斗！」

「ん？ 龍斗、達也、何か用か？」

おいおい、そんな呆れた様な顔するなよ。
殴りたくなるだろうが。

「とりあえずその振り上げた拳は下せ。話はそれからだ」

ちつ、しょ「うがないな。

なにやら急ぎのようだし素直に言つことを聞いてやるか。

「海斗、『試合が始まるとアラウンド出るみたい』と監督
からの伝言だよ」

「あれ？ もうそんな時間か？」

俺的な感覚ではまだ試合まで10分くらいあつたと思うんだが？

「ああそんな時間だ。お前がずいぶん考え込んでいる様子だから呼んできた方がいいと言つた監督の觀察眼は正しかったな」

「そうみたいだな」

いかんなー。

試合前だといつに全く試合に集中できていない。

これではいかん。

遊びは常に全力で、勝負事なら死力を尽くす。

それが俺のモットーだといつのにこの体たらくとは本当にいかんな。

……ひりで気合を入れなおしておひら。

気合を入れるために思いつきり頬を叩く。

「凄い音がしたね」

……我ながら思いつきりやり過ぎたな。
ちょっと頭がくらくらする。

まあ、気合も入って気持ちも切り替えたからよしとするか。

「準備はできたか？ 行くぞ」

「馬鹿言え。それはいつものセリフだ。海斗こそ本当に準備はいんだろ？ な？」

そんなに心配そうな顔をするなよ。

男のお前がそんな顔していても不愉快なだけだ。

「もちろんだ。今日は俺の粘り強いティフォンスで無失点で抑えてやるよー。」

「なら、俺はスピードを生かしてハットトリックを決めてやるー。」

「それなら僕も華麗なボール捌きでハットトリックを決められるよう頑張るかな」

「「「勝つぞー！ー！」」

もちろん試合は俺たちが勝った。

今は翠屋で祝勝会中だ。

そして俺は宣言通り、粘り強いティフェンスで無失点を達成した。

「それに比べてお前らは、自分の言つたことも守れんのか？ んん
？？」

「殴りてえ、殴りてえけど、ハットトリック決めなかつたのは事実だしな……」

「やうだね、我慢するんだ我慢するんだ、僕

必死に怒りを我慢するその姿がまたおかしくて、その姿を指さして笑いになつたけど、やることが無くなつたせいでまた見つけることが出来ていな少女のことに思考が飛んだ。

「達也、これはマジで重傷じゃね？」

「やっぱこへりい重傷だね」

なにせあの海斗が今の俺達を笑うことなく何やり考え込みだしたんだ。

「明日世界が終る」と言われたら、「やつかもしれない」と納得してしまった異常事態だ。

「」の1週間の海斗の頑張り具合からしておかしいとは思っていたけどここまでは思わなかつたな

そつなのだ。

この1週間海斗は俺たちと遊ぶ」とやがて金髪の女の子を探していた。

普段の海斗なら2・3日探して見つからなかったら諦めるもののうちに、1週間もの間探し続けた。

しかもその間一切悪戯はしていない。

まさに異常事態だった。

噂によると職員会議まで開かれて、さうに家庭訪問が実施されたらしい。

「何とかしてえよなー」

「やつだね」

この1週間、海斗と一緒に悪戯をしないせいで悪戯の楽しさも激減した。

居なくなつてはじめて気がついたんだが、海斗は悪戯をするときは終わつた時のフォローも考えて悪戯をしていたようだ。

俺と達也が2人で考えて実行した悪戯はやつている最中は面白いけど、終わつた後になんか厭な感じの空気が残ることが多かつた。それは悪戯された奴がこっちを不機嫌そうに睨んでいたからだつたり、後始末が面倒極まりなかつたり、と理由は色々だつたけどそのせいで悪戯の楽しさが激減したのは確かだつた。

だから俺達のこれから楽しい学校生活の為にも少しでも早く海斗には立ち直つてもらわないといけない。

「ナビ、海斗を立ち直らせねばアヤツアレバいいんだナリツヘー。」

そうなんだよな。

少し考えて驚くことになつた。なんと海斗が俺たちに頼つてきたことは悪戯の実行を手伝うことやちょっとした雑用くらいで、プライベートのことは全く頼つてくれることが無かつた。

おかげでどうやつたら海斗を立ち直らせられることができ全く予想がつかない。

女の子と付き合わせようとしても面倒くさがつて嫌がるだけだろう

し、悪戯に誘つても断られた。

他に思いつくのは食べ物で釣る」とべりいだけど、ぶつちやけ海斗の家の食べ物のレベルを家で用意しようと思えば材料費だけで諭吉さまが何枚も飛んで行くから無理だ。何気にこいつの家金持ちはなんだよなー。

「なんかものを渡すつてのはどうだ?..」

「具体的には?」

「ヤリの抜け殻とか?」

「今の時期にそれは見つからないでしょ」

「ああ、俺も言つてそつ思つた」

だが、俺達の数少ない知識の中に男に渡すプレゼントなんて項目はない。

女の子に渡すプレゼントの項目なり里香に渡すためによく調べているけどな。

ん?

そういうえば、里香に渡すつもりだったプレゼントで面白やつなやつがあつた筈だ。

本当なら俺と里香で一つずつ持つもつだつたけれど、この際は里香に渡すだけでいいか。

「達也、これなんてどうだ? 中々綺麗だし、いい感じに見たこと

もないよつな不思議な感じなんだが

ポケットの中から持つてきいていた青い石を取り出して見せる。

「そうだね。見たところサファイアにしては色がおかしいし、ほんと不思議な感じの石だからもしかしたら海斗の興味を引けるかもね。黙目もとで試してみよ!」

「やうするか。おに海斗プレゼントだ受け取れ……！」

俺の向かい側で椅子に座つて考える人のポーズをしていた海斗に向かつて思いつきり石を投げつける。
石はまっすぐ飛んでいき頭に直撃した。
まあ、1メートルくらいしかないから外しようがないけどな。
当たつた音からしてずいぶん痛そうな感じだけど大丈夫か？

おお、頭を押さえついぱくまつてしまつてしているな。
そんなことを暢気に考えていられたのはそこまでだった。

「…………龍斗、貴様覚悟はできているんだろ?」

やべえなこれは。

俺達の悪戯にキレたときのバーングスと同じレベルの危険度だと俺の勘がわざわざいている。

「龍斗！ なんで投げつけたりなんかしたのさー。普通に渡さつよ
！」

達也の言つとおりだ。

少し前の俺、なんで投げつけた！

「つこやつこひしまった。後悔せぬつかひしてゐる」

「マジで後悔しかねえ。

なんで俺はこんなことやつてしまつたんだらつか?

殴り合ひの為に準備運動をしてゐる海斗を眺めながらそんなことを思つていた。

「海斗、海斗! 落ち着いて! そして足元を見て! やけに龍斗からのおプレゼントがあるから! あつと氣に入ると思つから! ……!」

ナイスだ達也!

これで少しでも海斗の氣が収まることを祈るが。

『躊躇される』から『叩きのめされる』位にはワクンクダウンしてほしこな。

「なに? プレゼントとまじめに? もしかしてこの毒ご石か?」

足元に落ちてこる口に氣がついてくれたようだ。この隙に逃げる用意をしておこう。

「やうだや。里香に一つプレゼントして2人で同じものを持つ予定だったんだが、お前の落ち込みようが見てらねたくな。1つだけお前にプレゼントしてやる」

「…………」

やべ、言い方が偉そうだったかな?

これでさりに機嫌が悪くならないとこ、「ありがと」…………は？

俺の聞き間違いか？

海斗が俺にありがとひと言つたよつて聞いえたんだが？

なあ聞き間違いだよな？

そんな思いを込めて達也の方を見てみたが、どうやら達也にも海斗の『感謝の言葉』が聞こえていたようだ。

口をポカンと開けたまま、呆然としている。

分かるぞ。

その気持ちは痛いくらいわかる。

いつたい何が起きたというんだ！

そこまでその石が氣に入ったのか？

「本当にありがとうございます。龍斗、お前と友達になれて良かったとこれほど感謝したことは今までない。本当にありがとひ。それじゃあ悪いが俺はこれからバーニングスにおくるシュークリームを取りにいかなくちゃいけない。それじゃあな」

海斗は石を胸のポケットに入れるとそのまま翠屋のカウンターの方に向かつて行つた。

「おひ、おひ」

一気に上機嫌になつて俺達の目的は果たせたが、いつたい何でだつたんだろうな？

今日は初めて龍斗と友達になつてよかつたと心の底から思えたな。
今までも一緒に楽しく馬鹿やつてきたけど、心の底からこいつと友
達になつてよかつたと感じたのはこれが初めてだ。

俺の中で龍斗の株が急上昇した。

なにせ俺がこの1週間探し求めても見つけることができなかつたあ
の金髪の女の子の手掛かりを見つけてくれたんだからな！

「アンタ妙に上機嫌みたいだけどなんか悪だくみでもしてんの？」

言われの無い中傷だな。まあ、今の俺は機嫌がいいから許すけどな。
むしろ余裕を見せつけてやる。

「ふつ、バニングス、俺はいつも悪だくみばかり考えているわけじ
やないぞ。それよりバニングスの方こそ人を疑つてばかりだから額
から皺がとれないんじゃないのか？」

「皺なんてないわよ！」

テーブルを叩くな。

お茶が零れるだろうが、それに

「鏡が無いから気がついてないだけだ」

「アンタねー」

怒髪天を突く勢いとはこのことかと言つた感じで怒つてゐる。
バーニングスらしいな。

「アリサちゃん抑えて抑えて、此処で暴れちゃ他のお客さん迷惑
が掛かっちゃうよ」

「…………すずかの言つ通りね。海斗、この場は見逃してあげる
わ。だけど覚えてなさいよ?」

ナイスだ月村。

だがミスつたなー。

バーニングスの機嫌を取るためにシュークリーム奢つてゐるのに機嫌
を取るこの場で怒らせるとか何やつてんだよ俺。
まあ、過ぎたことはビリしようもないから、此処からビリやつてバ
ーニングスの「機嫌取りをするか考えるかな。

まずは話を適当にそらす」とこじよつ。

丁度いい話題もあることだしな。

「高町、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいか?」

「えつと何かな?」

いや、お前とお前の友人2人は疑問に思つていないうつなんだが、

「なんでフィレットがここに居るんだ?」

「あつ、海斗君には紹介してなかつたね。」のナマコーノ君つづいて
うんだよ。可愛いでしょ」

まあ確かに小動物系の可愛いしがあると迷つんだが、俺が聞きた
かつた意味はセリフじゃない。

「いや、そんなことはどうでもよくてな。一応『』は飲食店だと思
つんだが、そこにペシトを持ち込んでいいのか？」

「あつ」

「そう言われてみればセリフだよね
「確かにアンタの言つ通りよね」

「いや、もしそれがフイレットの踊り食こという美由希さんの新作
創作料理なら仕方ないと思つんだが…………」

おおー、『』のフイレット人の言葉が分かるのか?
さつきまでバーニングス達にいじられてぐつたりしてたのに急に立ち
上がつてきょろきょろしだしたぞ。

「さすがにお姉ちゃんでもそれはないよー！」

『お姉ちゃんでも』ってところに高町の姉の料理への信用度が現れ
ているな。

「分からんぞ。なにせ食べ物を炭に換えるのが得意な美由希さんのことだからな。炭にしなくてすむ料理法としてフイレットの踊り食いを考えたのかもしけん」

「……そんなことないって言いたいけど、『』めんお姉ちゃん、こ

の前お姉ちゃんが『生のままで完成させられる料理だつたら私も作れるよね』って言つてるのを聞いてしまつた私からはこれ以上反論できないよ』

小言でぶつぶつ言つてゐるようだが、この議論は俺の勝利のようだな。

そうは言つても勝ち負けなんぞよりバーニングスの氣を逸らす』ことにだけ成功しているかが問題なんだがな。

「まあ、大人しいみたいだし俺は特に気にならないんだけどな」

「ならなんでそんなこと言つたの！？ 海斗君のせいでユーノ君が怯えてるのー！」

「ああ、すまないなユーノ。生きたまま食われるなんて嫌だよな」

おおー、頷いてるや、このフィレット。もしかしてマジで人の言葉が分かつてるのか？

「なあ、高町、このフィレット人の言葉が分かるのか？ さつきから妙に俺の言葉に反応したとしか思えない行動してるんだが」

「わつ、そんなことはないと想つよ？ とつとも頭が良いけじね」

全く隠せてないが、何か隠してゐなこれば。
といつかユーノよ。

お前が本当に人の言葉が分かるのなら、高町がどうにかして誤魔化そうとしているのに、高町の言葉に對して頷くような反応をするのを止めろよ。

疑いが深まるだけだぞ？

「さうよ。確かにこのフィレットは頭いいみたいだけど、フィレットに人の言葉が分かるわけないじゃない。馬鹿なの？」

「バーニングス、これはロマンの問題だ。いいか？ 確かに今まで俺たちは人の言葉を理解できるフィレットに会ったことはなかったかもしね。だが、もしかしたらこのフィレットは人類が初めて出会った人の言葉を理解できるフィレットかもしれないだろう？」

ロマンは大事だ。

それがなかつたら毎日がつまらなくなる。

「ああ、馬鹿なのね。そんなわけないじゃない」

「夢が無いなー」

「アンタは夢の見過ぎだよ」

まあ、否定できんな。

「だけど、夢を見れないよいはよほどここと思ひば。バーニングス達には将来の夢とかないのか？」

「あるわよ。私はお父さんの会社を継ぐことよ」

「私は工学系の仕事に就きたいかな」

「…………私はまだ決まつた夢はないかな」

ふむ、バーニングスと月村にはある程度の将来のビジョンがあるよつ

だが高町はないみたいだな。

まあ、小学3年生でしっかりした夢を持つてる方が少ないと思つんだけじな。

それにしてお花屋さんとかケーキ屋さんとかそんな感じの夢も持つてないんだろうか？

夢はひとまず持つておくといいものだと思つんだが。

「高町は何にもないのか？」

「う、うん、まだこれになりたいって夢はないかなー」

「せうなのかな。まあ、小学3年生で夢がしっかり固まつてる方が珍しいよな」

「せう~♪アソンタの将来の夢は何なのよ」

よくぞ聞いてくれたバーニングス。

俺には壮大な野望があるのだ！

「俺の夢か？ それは『新世界の神なる』ことだ！」

お前達正気を疑うような目で見るなよ。

確かにこの言い方だと到底正気だとは思えないだろ？ たすがここまで露骨に態度に表さないでもいいだろ？

「……………病院行つたら？」

くつ、負けんぞ！

その程度で俺は夢を諦めない！

「バーニングス、俺は本氣で言つてこるんだ。馬鹿にしないでもうおひ

「それならなおちり病院に行くことを勧めるわ。アニメとか漫画の見過ぎで本氣で現実と妄想の境田が分からなくなつたんじゃないの？」

ふん、そんな境田をぶち壊すのが俺の夢なのだ。

「そんなことはないぞ。まあ、『新世界の神になる』と言つても別に俺は世界をゼリフじみつけられたくないしな」

「それなりぢやって神様なんかになるのよ。」

「それまむちりん新世界を作つてだ。創世は神様の偉業の中でも尤もポピュラーなものだらつ。」

「ねえ、なのは、すずか、じこつ本氣で病院に連れて行つたまづがいいんぢやない」

「…………私もさすがに元こままでこべとフオローできなこよ」

「円村家でかかりつけの病院があるからこじを紹介しようかな

おこおい、目の前で内緒話とかするなよ。凄まじく気くなるだらうが。

まあ、内緒話が終わるまで、ユーノをいじって暇を潰すか。

やつと内緒話が終わつたようだな。

暇すぎてユーノを弄り抜いてしまつたぞ。
そのせいいかぐつたりしたまま動かなくなつてしまつたが問題ないだろ
う。

少なくとも俺にとってはな。

「海斗君、ちょっと待つてね。お父さん達に頼んで黄色い救急車
を呼んでもいいから」

「待て高町、本気で俺を病院に連れて行ことするな

「冗談なら笑つて許せるが、本気だと全力で怒らざるを得んぞ。
俺の夢を馬鹿にするといつは重罪だからな。

「だつて、海斗君の夢は本当に夢物語だよ？ 叶える方法なんてな
いんだよ？」

「そんなことはない。キチンと俺には夢を叶えるための具体的な方
法に心当たりがある。といつそれさえないのでこんな夢を持つ
はずがないだろうが

「……………海斗頼なうそつとも言ひ切れない氣がするの」

「同感よ」

「否定はできないかな」

田嶋の行いを少し改めるべきだらうか？

俺の評価はいまでやばいものだつたのかと今実感しているところだ。

「で、その具体的な方法つてのは何よ？」一応聞いてあげるわ」

「よくぞ聞いてくれた。そう方法とはな。量子コンピューターを作ることだ」

「何それ？」

「何なのかな？」

まあバーニングスと高町には分からないだらう。
というより月村が「ああ、あれか」と言つ顔をしているのに驚いた
ぞ。

「無知な奴め。月村は知っているようだぞ」

「わうなの？」

「うん、と言つても私はお姉ちゃんが話してたのを聞いただけだからあんまり詳しくはないけど、簡単にいえば凄く性能が良いコンピューターだよ」

凄い簡単に言つたな。

それくらいこじや全然凄さが伝わらないと思つんだが

「海斗、それが何で新世界の神になる具体的な方法なのよ」

ほら伝わってない。

いや、これは単にコンピューターの知識が無いだけか？

「それはもちろんそれ使って新世界を作るからだよ」

「わけわかんないわ」

まあ、コンピューターの知識が無いならしょうがないか。

「いいか、量子コンピューターがあればそれを使って新世界と言つても過言ではない様なゲームが作れるんだ。そこにはドラゴンもいるし、エルフとかドーウフとかもいる。そしてそのゲームのクリエーターとなつた俺は果ては魔王とかも自由に生みだせる。まさに新世界の神になる」

知ってるか、とても簡単なプログラムだけど、ただ単にディスプレイに『Hello world』と表示させるだけのプログラムしかまだ作ったことはないけど、何かを自分で作り出した時の万能感は凄まじいんだぞ。

「ああ、早い話なんか凄いゲームを作るのが夢なのね」

「…………… そう言わると何か釈然としないがそれも俺の夢の一面ではあるな」

「へえー、アンタのお兄さんもゲームのプログラマーって聞いたんだけど、お兄さんの影響?」

「とうより家族全員からの影響だな。ほら俺の家族の仕事って女優の母、アニメの脚本家の父、ゲームのプログラマーの兄、漫画家

の姉、小説家の祖父、音楽家の祖母って感じだりつ

「凄いよね」

本当にそう思ひ。

よくぞここまで揃えたって感じの布陣だからな。

家族だけでエンターテイメント作品を作れる。

「その影響を受け続けてきたからな。何か作ることをやつてみたかったんだ」

「それで、新世界を作るとかどう考へても思考がぶつ飛び過ぎでしょ」

そつかもしれん。

だが夢は大きければ大きいほどいいというのが家の家族のモットーだからな。

はじめから叶いそうな小さな夢だけ持つっていても大成は望めないそうだ。

ふむ、機嫌も随分良くなつたようだ。
ご機嫌取りはここまでにしておくか。

携帯で時間を確認してみたら丁度祝勝会も終わりに近づいてきたみたいだしな。

ん?

メールが入っているな。

なになに、あー、馬鹿姉め。

また締め切りまじかで修羅場つてるのか。

小3の弟にべた塗り手伝えとかそれはどうよ。

まあ、絵の描き方を習つている俺としては手伝わざるを得ないんだ
けどな。

「悪い、家の姉が漫画の締め切りで修羅場つてるみたいだ。それを
手伝いに家に帰るわ」

「もう、それじゃあね。今日は意外にいい『ティファーンスしてたわよ』

おお、バーニングスから褒められた。
予想以上に照れ臭いな。

「それは当然だ」

だからそれを悟られないように見栄張らないとな。

「丹村と高町も明日学校でな」

「うん」

「ばいばい」

さて、せつせつと帰つて姉の手伝いでもするか。

夢にまで見た非日常、だけ・・・・・（前書き）

残酷な描写にご注意ください。

夢にまで見た非日常、だけど・・・・・

さて、今日は幸運にもこのあの女の子が探していたジュエルシード？とか言つ謎の石いりを手に入れることができた。

後はこれを俺が持つてますよーとアピールできればまた会つことができるだと思うんだが、さうどうしたものか。

今目的の女の子はどうにじるか全く分かっていない。
そんな相手の田に止まる様なアピール方法とは何なんだ？

インターネットの掲示板に書き込むか？

いやそんなことをしても必ず見てくれるとは思えないし、そもそもあの年の女の子が自由に使えるパソコンを持っているかという問題がある。

電柱とかに張り紙でもするか？

これも張るべき範囲が限定されていらないから必要となる張り紙の数が膨大になる。

そんな無駄遣いを母に納得させる方法が思いつかないからこれもダメだ。

どうやってあの女の子がこの石いりを探しているか分かればこっちからこの石を見つけやすくなるんだが、それも田間担当がつかないしなー。

と言つてもその探してゐる手段が非日常的なものだったら俺にはどう

しうつもないんだけどな。

じうじたもんかなー

ん?

あれは龍斗と多村か?

相変わらず人目もばからずイチャイチャしてんなー。
街中で噂になるぞ。

おや、なんか龍斗が多村に渡してるみたいだな。
彼女にプレゼントを渡すとか付き合い始めて間もないのに龍斗はダメだな。

とこりうか、俺の見間違いじや無けりや龍斗が渡してるのはジュエル
シードだと思つんだ。

そしてそれが何やら光り始めてるんだが、じうすればい、つめーー。

唐突に体が宙を舞つた。

何が起きた！？？？？

下を見てみると木の根みたいなのがコンクリートを突き破つて成長
し続けているのが見えた。

成長早過ぎだろ。

つーか地面が遠い、5~6メートルは上に吹っ飛んでる。

このまま落ちたらただじやすまない。

頭から落ちたらさらに最悪だ。

何か捕まるものはないか！！

周りを見回すと街路樹の木の枝が丁度手が届く範囲に有った。

急いで手を伸ばして枝を掴む。

なんとか俺の体重を支えてくれた奴うだな。

このまま足の方から落ちれば最悪でも足を挫く位で済むし、人に受け止めてもらえば無傷で済む。

そう思つて安心したのに世界つてやつは――――――――

急激に遠ざかる地面、せいぜいまで5～6メートルくらいの高さで止まってしまったのは、俺は一瞬の間に高層ビル並みの高さまで運ばれてしまつていた。

木の成長スピードじゃねえだろ、これは。

見える地面は遙か彼方。

これは確認するまでもなく落ちたら死ぬな。

ମହାଦୀର୍ଘିତାନୁମାନ

ても無駄だな。
俺にはどうしようもない。

誰かが気がついて助けてくれるのを待つしかない。

そのためにも枝が折れて落ちる様なことが無いようこしないとな。

そう思いながら腕を少しずつ動かして枝の根元の太い方に移動する。突然枝が折れないか心配しながらの移動は酷く疲れるが、やらないと死ぬ可能性が上がるだけだ。

いつ助けが来るか分からぬのに枝にぶら下がりっぱなしなんてのは愚の骨頂だ。

すぐに腕が疲れて掴んでいる枝を離してしまつだらう。

よし、根元まで無事に来れた。

もう腕がずいぶんと疲れてきてプルプル震えているけど、頑張れ俺。後は身体を枝の上に引き上げるだけだ。

疲れた腕に精一杯の力を込めて身体を引き上げる。

あとけよつとで身体を枝に乗せれるぞ。

よし、身体を乗せれ、何かが折れる鈍い音がした。

唐突に訪れる浮遊感、身体が重力に囚われ自由落下する。

ははっ、マジか。マジでか。

あそこまで順調にやれて、最後の最後で枝が折れるのか。

神様よ。

もしいるのならアンタの性格は最悪だな。

地面が凄い勢いで迫ってくる。

地面とキスすることになるまで後10秒もないだろう。

家族の顔が思い浮かぶことはなく、走馬灯も走らなかつた。

ただ夢を叶えることなく死ななければいけないのが無念だなと思つただけだ。

死にたくねえな。

「海斗君、今助け」

地面にぶつかる直前に高町の声が聞こえた気がしたが、きっと気がせいだらう。

高町がこんなところにいるはずがない。

地面にキスする俺の体。

そして、俺の世界は真っ赤に染まつた。

「それにしてもアイツの夢は本当にぶつ飛んでたわね

「やうだね。なんといつても『新世界の神になる』だもんね

「家のお姉ちゃんが言つてたけど量子コンピューターって、そんなものが作れるって分かつただけで実際にはどうやって作ったらいいか全く分かつてないんだって、だから本当に海斗君が作ろうと思つ

てもそういう簡単に作れるもんじゃなこと思つてんだが……

うふ、すずかちやんが口うるのも分かるよ。

「アイツなら作りそりやね」

「「「ひさん」」

私もアリサちやんと同じ意見だ。

「アイツはいつも馬鹿ばっかりやつしのナビ、勉強とかは異様にで
あるわよね」

その通りなの。

いつもいつもふざけている印象なのに海斗君はテストで100点以外とったことが無いの。

「海斗君いわく、『知識がいくらあつても困る』じゃない。その逆
はあるかもしないがな』ってことだったけど」

「それにしたって頑張過ぎよあこつばーー！」

本当にそうだよ。

それに海斗君は田井の「いの」のインパクトが強いせいであまり意識
されてないけど、勉強もできてスポーツもできる。
欠点はその特殊過ぎる性格くらいだよ。

それさえ無けれ、あれ？

突然妙な違和感を感じた。

あれこの感覚つてもしかして

『なのは…！ 話してた途中で「めん。」だけど近くでジュエルシードが発動したみたいなんだ！ 急いで向かわないと…』

やつぱりそうなんだ。

『うん分かったよ、ユーノ君』

「「めんね。アリサちゃん、すずかちゃん。ちょっと行かなきゃいけないところができたから」

返事も聞かずに椅子から立ち上がり走り出す。

「ちょっとなのは…？」
「なのはちゃん！？」

「ごめんね2人とも、でもジュエルシードが町中で発動したらとつても危ないんだ。
だから本当に「めんね。

近くの路地に入つて人がいないことを確認する。
よし、人はいないみたいなの。

『なのは、結界を張つたから「」からは飛行魔法で飛んで行く。』

「分かつたよ、ユーノ君。行くよ、レイジングハート」

『Y e s , m a s t e r

魔法で空に駆けあがると見えたのは巨大に成長した木が街を飲み込もうとしている姿でした。

私があの時龍斗君の持っていたジュエルシードみたいなものを回収していたらこんなことはならなかつたかも知れないのに、どうして私は『なのは、あそこを見て！』

「えつ？」

ユーノ君が指したには海斗君がいた。結界が張られていて普通の人はいなははずなのに海斗君がそこにいた。

『なのは、急いで助けよつ！　あの掘まつている枝が折れたら最悪だ』

「うん！」

ここから見た感じ、海斗君は枝が折れにくい根元の方に移動しているみたいだし、もうちょっとで身体を枝の上に乗せれるみたいだ。きっと助けられる。

そう思つていたのに急いで海斗君のところまで飛んで行く途中で、枝が折れた。

「レイジングハート！！　全速力出すよー！」

まだ海斗君のところまでかなり距離がある。

私が近づいて行く間にも海斗君はどんどん地面に向かつて落ちていく。

だめ！

「のまほじゅ聞に合わない！」

「レイジングハート、もつとスピードは出せないのー？」

『マスター、これ以上スピードを出すと止まることができず地面に激突することになります』

「それでも海斗君を助けるのに間に合わないよつぱビコのー！スピードを上げてー！」

『..... Yes , m a s t e r .』

魔力が凄いスピードでなくなつていく代わりに私の飛ぶスピードも一気に上がった。

これならぎりぎりだけどきつと間に合ひのー

海斗君との距離はもう5メートルもない。

あと少しなの。

後1メートル、手を伸ばして海斗君をつか 地面に海斗君が激突し、視界に紅が舞つた。

えつ？

それを見た瞬間、意識が真っ白になつた。

そのせいで減速することもできず地面に激突する私の体。

何度も何度も地面をバウンスして近くのビルの壁に激突してやつと
体が止まつた。

体中が痛い。

だけどレイジングハートが咄嗟に防御魔法で体を守ってくれたおかげで、ちょっと擦り剥いて打ち身ができた位で大した怪我はしていない。

立ち上がって、海斗君の居るはずの方を向く。

何が起きたか薄っすらと分かっていた私の心が見ちゃいけないって、叫んでたけど見られずにはいられなかつたの。

そして、後悔したの。

見えたのは紅い紅い血溜まりと、手足が無茶苦茶な方向に折れ曲がつて、腸が、肝臓が、胃が飛び散つた。

海斗君の体。

吐いた。

胃の中にあるもの全部を吐いた。

それでも吐き気は一向に収まらないの。

だつて海斗君はもう人型すらしていなかつたの。

「あ、あ、あああ、あああああ

何も言葉が出てこないの。

体も動かなくて、ただただ海斗君の死体を見つめることしかできないの。

私のせいなの。

私が頑張らなかつたから、私がもつと頑張つていれば、こんなことにはならなかつたはずなの。

ユーノ君も言つてたの。

ジュエルシーードはとても危険なものだつて、それなのに私は魔法の力を手に入れたのが嬉しくて、やつとこれで皆の役に立てるつて嬉しがつて、舞いあがつて。

結局誰も助けることなんてできなかつたの。

『なのは！－ しつかりして、なのは！－ まだ諦めるのは早いよ！』

「ユーノ君、だつて、あんなに酷い怪我いてたら助からないよ。家のお父さんが怪我したときも凄く酷い怪我だつたけど、あんなに血は流れていなかつたし…… まだ人の形はしてたの」

『諦めないで、なのは！－ この人はまだ生きている。僕の回復魔法を使えばまだ助かるかもしないんだ！－ だから海斗を助けるためになのはの魔力を貸して！』

そうなの？

まだ海斗君は助かるかもしないの？

なら、此処でうじうじ悩んでいるわけにはいかないの！

「分かつたの！ それでどうすればいいの！？」

『レイジングハートに魔力を込めて僕の体に当てて、そうすれば後はレイジングハートがやってくれるはずだからー。』

レイジングハートに魔力を込めてユーノ君の体に当てる。

「これでいいの？」

『ありがとう、なのは。よしこれならー。』

凄いの。

海斗君の体の傷がどんどん塞がつて行くの。

『なのは、レイジングハートを僕の体から離さないで！ 離れちゃうと魔力の供給が上手くいかないんだ』

「う、うん、ごめんユーノ君」

ユーノ君の言う通りにレイジングハートをユーノ君の体に当てなおすとしたけど上手くいかないの。

しっかりしないと駄目なのに、視界もぼやけて思つように体が動かないの。

なんで私は一番大切な時に動けないの！

『なのは！？ しっかりして！ まずい、魔力の使い過ぎだ！！！ なんでこの場面で！ このまま魔力供給を続けたらなのはの体もまずい！』

私の体なんてどうでもいいの。

私の体はどうなってもいいから、海斗君を助けるの。

だって、海斗君がこうなったのは私のせいなんだから。

「ユーノ君、遠慮しないで私の魔力を使って海斗君を助けて」

『なつ！ そんなことできないよ。このままなのは魔力を使い続けたら、なのはが死んじゃうかもしれない』

「そんなことどうだつていいのー！ 私の心配なんかしないで海斗君を助けるのー！」

『そつ、そんなことはできないよ』

「ユーノ君ー！」

なんで、何で分かつてくれないのー？

『今のは魔力を全部使ってもこの人を助けることはできない！ だから「やってみなきや分からぬじやないのー！」』

「諦めるのは簡単なのー。だけど諦めたらきっと後悔するのー。だからお願いユーノ君ー！』

『分かったよ、なのは。それ「あつ、ぐ、があ」』

「海斗君ー！」

意識が戻ったのー？

「…………高町か？ もしかして、俺は死んだはず、なのに、高町が、見える。もしかして、高町も死んだ、のか？」

途切れ途切れの声だけ海斗君が話しかけてくる。
今までのユーノ君の治療はちゃんと効いてたんだ！

「死んでなんかないよ。私も海斗君も！ もう少しだけ頑張つて
！ 私とユーノ君で助けるから！」

魔力をレイジングハートに込めながら励まし続ける。

「ユーノ君やつてーー！」

『分かつた！』

「どうやつてだよ。ユーノ君で、のが、誰だか、知らないけど、これだけ、血が流れてるの、にただの小学3年、生の高町が俺に、出来ること、なんてない、だろう？」

少し前の私ならやつたかもしないの、だけど今の私はみんなを幸せにするための力を知った今の私ならできることがあるの。

「いいから怪我人は黙つて治療されるのーー！」

体がふらつくけど我慢なの。

ここで倒れるわけにはいかないの。

ああもうー 私の体なんだから私のことちゃんとを聞くのー

だけど気合いをどれだけ入れても絶対的な魔力の不足は解決しなく

て、どうどう体を支えきれなくて海斗君の方に倒れこむ。

『なのはー。』

あっ、だめ。

このままじゃレイジングハートが海斗君の顔に当たつかけや。

頭が割れてたのを何とか治したばつからそれは避けなさい。

うん、これで頭には当たらない。

でも、めんね。

完全に海斗君からは逸らすことはできなかつたんだ。

レイジングハートが海斗君の胸に当たつたその瞬間、光が全てを塗り潰した。

死になくなえな。

うん、いくらなんでも小学3年生で死にたくはない。

俺にはやりたことが山ほどある。

その数は多過ぎて100歳まで生きても全部やり切ることなんてできただろうけど、そんなことは問題じゃない。

問題はやりたいようにやって、最後は笑って死ねるかと言つことなんだ。

少なくとも、俺は家族からはそう言われたし、俺自身その通りだと思った。

だから俺はこんなとこで死なない。

絶対に死なない。

こんなところで死ぬくらいなら悪魔に魂を売りつけてでも生き延びてやる。

あれ？

全く感覚が無かつたのに胸だけ妙に暖かい。

これはあれか？

凍死する寸前暖かくて気持ち良くなるとあれと同じ現象なのか？

嫌だ。

死にたくない。

こんなにも俺はそう思つて居るといふのに、神様は余程俺が嫌いなみたいだ。

高町がメカメカしい杖ごと俺に向かって倒れこんでくる。
あれば当たつたら今の俺は死ぬだろ？

いい感じでじつじつしてるし、高町の体重も乗ってる。

それにしても金属でできた杖ってファンタジーっぽくないな。
まるで魔法少女が持ってるみたいな感じのだ。

魔法少女マジカルなのは、ってか？

はは、俺って結局最後までこんな馬鹿なこと考えて死ぬのか。

あー、くそ、死にたくねえ。

俺の胸にはの持っていた杖が当たったところで俺の意識は白く
染まった。

光が収まつた後に残つていたのは、完全に怪我の治つた海斗^{海斗と血溜まりだった。}

何が、起きたの？

あれだけの怪我が一瞬で治るなんて、あつ、もしかしてあの光は

「ユーノ君、もしかしてジュエルシードのおかげ？」

『たぶんそうだと思うよ。今この人の体を調べてるんだけど、どうもリンクカーファにジュエルシードが融合してるみたいなんだ』

「ええっ、それって大丈夫なの！？」

たしかジュエルシードって凄いエネルギーの塊だから、あの神社のワンちゃんみたいにすごいことになっちゃうんじゃないの？

『うん、普通なら大丈夫じゃないはず、なんだけど…………』

「なぜか大丈夫？」

『うん、 なんだ』

よかつた。

本当によかつたよ。

大丈夫な原因が不明なのは不安だけど、今は海斗君が助かったのを喜ぼう。

そして私は

「ユーノ君、海斗君をお願い。私はジュエルシードを封印するから

『えつ、なのはの魔力はもう底を突いてるはずじゃ』

「うん、私もそう思つてたんだけど、さつきジュエルシードが光つた後、少しだけ魔力が回復したんだ」

もしかしたらジュエルシードが私の願いも少しだけ叶えてくれたのかもしれないの。

「だから行つてくるよ、ユーノ君！」

『うん頑張つてなのは！』

「皆さん、知つている人もいるかも知れませんがつい最近大きな事故がありました。その事故に巻き込まれて海斗君が入院中だそうです。1日でも早く海斗君が学校に来れるようにみんなでお見舞いの言葉を書いた色紙を届けようと思っています」

『はいっ！』

「色紙を回しますので順番に書いて行ってください」

端の方から色紙が回つていつてゐるから、まだひたひた回つてゐる
はちよつと時間が掛かりそうなの。

「それにしてもアイツが入院してゐる姿とか全然想像できないんだけ
ど」

「そりなんだよねー。海斗君はいつも元気いっぽいなイメージし
かないよね」

うん本当だよね。

あの海斗君が入院している姿なんて普通なら想像できないと思うの。
でも逆に私はあの大怪我している海斗君の姿を見ているから、入院
程度で済んでるのが信じられないの。

「みんなもやつぱりいつ思つのかな？」

「そりだな。海斗は殺しても死ないようなイメージだったからな。
入院したって聞いて本当に驚いたぞ」

「アンタも巻き込まれたそりだけ、大丈夫なの？」

「もちろんだ。ちょっと体を打ったぐらいで全然大したことなかつ
たぞ。ただちょっと里香が心配し過ぎてうつとおしく感じたけどな

人の心配を鬱陶しがつちやだめなの。

「だめだよ。そんなこと言つちや」

「いや、俺も心配してくれるのは嬉しいんだけどな。はちよつと癌が

できただけで何時間も泣き続けるのはおかがになー

「まあ、そんなことはどうでもこいわ。それより色紙が来たみたい
だからせつせつと書くわよ」

『はーい』

楽しい入院生活

入院生活最高！！

何にもしなくていいどころか、俺が頼んだことを家族がやってくれる。

本が欲しいと言えば図書館で借りてくれるし、欲しいタイトルが無ければ買っててくれる。

しかも、読む時間はいくらでもある。

漫画が欲しいなら漫画を頼んでもいい。

絵を書きたいなら紙と鉛筆を、残念なことにゲームの持ち込みは禁止されていたがそれでも十二分な環境だ。

「こ」のまま入院生活をずっと続けていたい

「そんなこと言っちゃダメなんよ？ 退院したくてもできない人もいるんよ？」

「つむ、ずっと通院し続けているといつ八神がいつと実感が籠つているように感じられるな」

我ながら無神経な発言だな。

まあ、本心からの言葉だから訂正はしないがな。

「はあ、心の広い私やから怒らんけどな。他の人間やつたら怒髪天を突く勢いで怒られるで？」

「んな」と言つても怒らないハ神は優し過ぎの位だと思つけどな。

「知つている」

バーニングスがそんな感じだ。

俺があまりにも無神経な発言をしたときは実力行使で襲いかかってくる。

「知つてそう言つんやから海斗君も大概やなあ」

「いやー、照れるなー」

「はあ」

おいおい、そんなに深いため息をつかないでくれよ。
といふか関西人なんだから突っ込みとかで上手く会話をつなげと思うのは俺の無茶ぶりなのだろうか？

「八神にまでそんな反応されるといよいよ俺も態度を改めた方がいいかなと思えてくるな」

「私にまでつてところが気に入らんけど、マジで他の人にもそんな対応しとるん？ それで友達なくさんのが不思議でたまらんのやけど」

そんなに不思議なことか？

ちょっとつまく立ち回れば大概の事は許してもらえるだ。

「上手い具合にやれば大丈夫だ。そしてそう言つキャラだと周りに認知されればもう完璧だな」

「随分人に迷惑かけてそつた生き方しどるなー」

「おお、そんなに責める様な目で見るなよ。
俺はMじゃないんだから嬉しくないぞ。」

「まあ、迷惑ばっかりかけてるな」

「いかんのやで、人に迷惑かけちや」

「それを言つなら存在するだけで迷惑をかけ続けるハ神はもつと駄
目だな」

「.....」

あつ、凄い申し訳なさそうな顔して黙り込んじました。

大失敗だな。

つい口から出てしまつたがいくらなんでもこれは言つちやいけない
だろう。

なんとかフォローしないといけないな。

さてどうしたものか.....

よし思いついた。

「と言つても俺もハ神も人に迷惑だけをかけているばかりじゃない
から問題はないんだけどな」

「.....無理に慰めようと思へんよ? 私が人に迷惑
ばっかりかける存在つてことは分かり切つたことやし」

ハ神が鬱になつてる。

早く立ち直らせないと石田先生から俺が怒られる。

快適な入院生活のためにはそれは避けたいし、それ以上に家族の怒りが凄まじいことになるだろう。

そうなれば本の差し入れも漫画の差し入れも何もかもなくなつて最悪の入院生活が始まつてしまつ。

「いやいやいや、ハ神は迷惑だけを他人にかけているわけじゃないぞ？ 少なくとも俺にとってはそうだった」

「こんな私が人のどんな役に立つてるんていうん？」

ネガティブだ。

ハ神が超ネガティブシンキング状態だ。

いつも無理にでも明るく振舞つてゐるハ神にこんな暗い顔させたのは俺の失言なのかー。

それはちょっと心が痛いな。

しかたがない無意味に人を不幸にするのはさすがに俺の趣味に合わないからな。

機嫌を直してくれるように努力しよう。

「簡単なことだ。ハ神がいれば他の人間の自尊心が維持される。例えばハ神が一人で階段を登れなくて困つていたとしよう」

「まあ、よくあることやな」

ハ神の声が暗い。

俺のあんまりない良心にすら響く様なくらい声だ。

これを意識して出せるようになつたらハ神は悪女になれると思つ。

「そんな時は大抵誰か助けてくれるだろ？」「

「…………そやな、一人で階段が登れんて困つてるとこつも誰かが助けてくれるわ」

「いやそこで暗い顔するなよ。八神はその時十分人の役に立つてゐるんだから」

「どじが役に立つてゐん？ めっちゃ迷惑かけてるやん！」

「どじがなんかやばい」と言つたか？

ここまで声を荒げる八神は初めて見たんだが、まあ俺には気にならないがな。

この程度のことで怯んでいたら、バーニングスに怒られるのには耐えきれる。

「いやいや、滅茶苦茶人の役に立つてゐぞ。八神を助けた奴は自尊心が満たされてるからな」

俺がまさにそうだった。

昔ちょっと悪戯でやり過ぎて自己嫌悪に陥つていた時、図書館で本が取れなくて困つてお前を助けることで、俺もまだまだ捨てたもんじやないと思えるようになつたからな。

「八神を助けた奴はお前を助けることによつて自分は良いことしたんだ、と思える。実際人助けは良いことだからな」

「…………まあ、そやな」

「困つてゐる女の子に救いの手を差し伸べた俺偉い。最高！ 国は

俺を表彰すべき、むしろ神の「」とく讃えるべきとおも「さすがにそれは言い過ぎやう！」

突つ込みの為に叩かれた頭がちょっと痛いがハ神を立ち直らせて、俺の快適な入院生活を維持するためには必要なことだつたと思つことにしよう。

でないと何か報復をしてしまったうだ。我ながら厄介な性格してゐるな。

「おおー、ハ神の突つ込みが復活したぞ」

だから茶化して、意識を逸らしてしまおう。

「一応頭打つて入院した奴の頭を容赦なく叩くとはさすが関西人、突つ込みに容赦がない！」

「「めん……」

ああ、そこで落ち込むなよ！
むしろ馬鹿な」と言つちやいかんととか言つてからに俺に突つ込んでこい。

そうしなければ、お前の機嫌をとるといつ俺の目的が達成できないじゃないか！

「謝るな！ むしろせらうに突つ込んでこい！」

「…………いや、無理に私の機嫌を直そつとせんとええんよ？
そんな」とする必要なんか海斗君にはあらんやう？」

あれ？

ばれてたのか。

いやー、勘が鋭い奴を慰めるのはこれだから面倒だな。
まあ、その程度のことで諦める俺ではないがな。

「いやいやいや、ハ神、それは間違っているぞ。大間違いだ。俺の所為で不幸になつた奴がいるならそいつの為にある程度のことをするには当たり前だろう？」といふか、お前なら人を不幸にしたら体売つてでもその人を幸福にしようとするだろ？」

「そうやな。確かにそうや」

えつ、否定しないの？

特に体売つての辺りとか冗談でしかなかつたんだけど、なんでそんなに深く頷くの？

まさか、本気でそう思つてゐるとでも言つのか！？

だとしたらこれからは聖女ハ神と呼ばなくちゃいけなくな

「やう考えると私は海斗君に何かお願いしてもいいやと思つんやけど、どうやうやうか？」

呼ばなくていいな。

ここでお願いをしてくる抜け目の無い奴に聖女の称号はもつたいない。

それにもうそつきたか。

機嫌は見た感じ少しほは直つてきたようだし、このまま上機嫌にするためにもここは言つことを聞いておくか。

「お願ひの種類にもよるがいいぞ。何をしてほしい？」

「それは海斗君が考えてな？」

マジか！

「おこーー！」にきて、そんな無茶ぶりをするのかー？」

「無茶ぶりなんかじやあらへんで、海斗君が私が喜ぶと思ったこと
をしてくれればいいだけやからな」

「それが無茶ぶり以外の何だと言うんだ！！」

ハ神の奴、[.]にきて急に[.]に[.]をやがた

101 -

もしかして今までの落ち込んだ様子は俺にお願いを聞かせるための演技だったとでも言つのか！？

油断ならないとかそういうレベルではないぞ！

「もしお願いを聞いてくれんのやつたら、私は落ち込んだ顔して石田先生と会うことになるなー」

「おつ、齧る気が！」

「脅す気なんかあらへんよー。ただね……」

駄目だ。

勝ち田が見当たらん。

俺の負けか

「…………俺の負けだ、八神」

「私の勝ちやな。それじゃあ勝つて気分も良くなつたところで私の検診の時間になつたもうたからお別れになるんよ」

「勝ち逃げする氣か！？」

「その通りやー」

完敗だ。

完敗したよ、八神。

だが覚えていろ、八神。

確かお前の誕生日は6月4日だったはず。

その時に飛びつきりのサプライズで迎えてやるー！

「よつ海斗、元氣にしてるか？」

「入院してゐる奴にそれ言つとか馬鹿だろ、龍斗」

「元氣そつだな」

言葉のキャッチボールが成立しないだと！？

「これだけ無駄口叩けるなら問題ないんじやない？」

「むしろなんでアンタはまだ入院しているの？」

達也にバーニングスも言いたい放題言いやがって、

「俺だって入院したくてしてゐわけじゃ「入院生活最高とか言つてたそつだけど？」

その言葉を誰から聞いたんだ。

「自分がやつてほしことをやつてもうらえる生活つて良こよな？」

「それはそつだな」

なら入院生活の良さは分かるさすなんだがな。
いや、外で遊ぶ方が好きな龍斗にとつては入院生活は楽しくないの
かもしれないが

「で、悪ふざけせ」今までにこじて、何しに来たんだ？」

バーニングスに月村、高町にフィレット、龍斗に達也が揃つてくれるとか何の用だ？

また見舞いか？

高町とフィレット以外はすでにこ～3回見舞いに来てたと思うんだが

「アンタのお見舞いよ。今度は私達だけからじゃなくてクラスメイト全員からのだけどね」

「今やうか？」

「やう今やうよ」

俺が入院してから既に1週間は経つているわけだが、もつと早くお見舞いをしようといふ意見は出なかつたのか？

「本当はアンタが入院した直後にお見舞いの話が出てたんだけどね。アンタのことだからすぐに退院してくるだろうって話になつてクラスメイト全員でお見舞いの為になんかするつてことは中止になつたのよ」

中止するなよ。

別に俺だって不死身つてわけじゃないんだから、怪我して入院することもあるぞ。

「でもアンタが1週間たつても退院してこなかつたから担任の先生

が気をきかせて色紙と花束を持ってお見舞いに行きました」とになつたんだけど、今度は行きたがるクラスメイトがいなくてね

ほほほ、あいつらめ。

俺が退院した時に備えて覚悟しておけよ。

「それで比較的あんたと親しい私達がお見舞いに来る事になつたのよ」

「そうか、それでこの変わり映えのあまりしないメンバーになつたわけか」「

「で、これがお見舞いの色紙と花束よ。なのは、すずか渡しちゃいなさい」「

月村が持っていたのはやたらと大きい花束だ。
これ相当高かつたんじゃないだろうか？

「ええっと、早く良くなつてね？ 海斗君のこと心配してる人もたくさんいるんだからね？」

「心配するな。検査が長引いてるせいで入院し続けているだけだから、それが終わればすぐに退院できるはずだ」

退院できるはずだ。

なぜか知らんがもう入院生活も2週間目に入つてしまつていい。
体になにも異常が無いのにまだ入院させとくつもりなのかと言つたくなる。

奴もいるだろ？ 俺は違うが

それにしてもこの花束大きくて見栄えが良いのは良いと思つけど、

大き過ぎて持りっこのはずがならないんだろうか？

病室におくにしても大き過ぎて邪魔なんだが。

「ほひ、なのはむわといと渡しなぞ。」

「うへ、うん、はい、海斗君、みんなから海斗君への早く退院できるようになります。メッセージだよ。ちゃんと読んどね？」

「ああ、…………それとあの時の話を聞かせてもうひかりな？」

笑って色紙を受け取りながら絶対に知りたい、あの事を聞かせてもうえるか小声で聞いてみた。

これを断られると高町の恥ずかしい思い出を暴露するつて齎すしかなくなるから、できれば素直に教えてほしいものだ。

高町を齎したなんてことが士郎さんや家の家族に知られたらどうでもないことになるのは目に見えているからな。

出来ればやりたくないが、聞かなければ絶対に後悔する。

「うん分かったよ。でもみんなが居る場所では話せないと今日の夜まで待ってくれる」「

よし、やっとこれで俺の望むことを知ることができる。最高だ。
感無量でしばり無言で高町を見つめあつてしまつた。

だけどそれがまずかった。

「2人して見つめ合ひちやうなんてもしかして…………」

「私もすずかもそれは知らなかつたわ」

「そう言えば2人とも1年生の時からの知り合いらしにし、不思議
じゃないのかな？」

あー、そっち方向に勘ぐられてしまつたか。

まあ、俺としては大して寒害がないから問題ないが、

「ちょっと待つて違うの！ 私と海斗君はそんなんじゃないの！？
と言つか私にだつて選ぶ権利はあるの！？」

前言撤回だ。高町よ。

世の中には言つてい悪いこと悪いことがある。

それを教えてやる。

俺のことが好きじゃないと否定するくらいなら俺も笑つて流しながら弄るだけだつたんだけどな。

そんなことを言われちゃ俺も黙つてられない。

「言つてくれるじゃないか高町」

出来るだけ声を低く抑えて感情も出さない様な声にする。

いつもされると本当に怖いんだよなー。

感情が読めないってところが特にな。

面白いくらい、高町の顔色が悪くなつていく。

さて、どの恥ずかしい思い出を暴露してやる。

「お前達知つてゐるか？ 実は高町は……」

お見舞いは石田先生に騒ぎ過ぎた俺達が拳骨を貰うとこいつ結末で幕を閉じた。

まあ、確かに騒ぎすぎだったな。

最後は俺対バーニングスと高町の大乱闘にまでなったからな。

他の入院しているおじいちゃんたちは楽しそうにそれを見てたけど、看護師や医師にとつては迷惑でしかなかつただろう。

でも、夜つて言つてもどうやって話すんだ？

病院に忍び込んでくるつもりか？

漫画とかじやないんだからそれは無理があると理解がいく。

もし携帯で話すつもりだったとしても病院では携帯は使えないぞ？

まさかそれを知らなかつたか忘れてるんじゃないだろうな。

外は暗くなりもう夜になつているといつのこと高町からの連絡などは一切ない。

もじこまま何にも連絡もなかつたらどうしてくれよつか。

ん？

なんか窓の外の様子がおかしいな。

なんか街の一部だけ色が変になつてゐる。

「ちよつとそこのお爺さん、窓の外なんか変じやない？」

「おお、海斗坊主か、どれどれ…………儂には特に変なところは見つけられんの～。どんな感じに変なんじや？」

「あそこ」のペルの辺りの色が何か変じやない？」

「ん～、儂には分からんのー」

俺の気のせいなのか？

それとも今さらになつて出てきたあの事件での後遺症か？

頭を打つたのが原因の後遺症は後から出ることもあるって聞いたことがあるけど、これがそつなのかな？

「海斗坊主、お前が言つてたのはあの変な光のことかの？」

「え」

考え込んで下がつていた頭をあげて見てみる。

お爺さんが指さしている先には巨大な光の柱が立ち上つていた。

なんなんだあれ？

もしかして、俺が探している非日常があれなのかな？

もしさうならかなりわくわくしてきたんだが、残念なことに今の俺

にはあそこに行くことができないんだよなー。

自分用の靴すらねえもん。

光の柱が消える。

あー終わってしまったようだ。

マジで残念だ。

「なんだつたんじやうなあれば

「なんだつたんじやうねー

お爺さんもどっかに行ってしまった。

そのせいでもた暇になる。

今日は昼の大騒ぎのせいで罰として俺が読むつもりだった小説とか漫画とかを石田先生に没収されたからやること無くて暇なんだよな。こつなると途端に入院生活はつまらなくなる。

高町も来るならさつさと来てほしいものだ。

さりとて1週間が経ち退院の日になつた。

腹の立つことにあれから一切高町からの連絡はない。

見舞いに来ることもなかつたし、俺の家族に伝言を頼むといつても

もなかつた。

おかげで俺は聞きたことを全く聞けてない。
そのせいでかなり苛々しながら「ゴールデンウィークを過い」りと云
なつた。

高町にあつたうどいことなのか問い合わせてやる。

「ド、况々そと姉さんはまだゲームセンターでいたの？」

『そんなものはこの世にな』

「ああー」

兄さん休みとれなかつたんだ。

まあ、今勤めている会社が新作のゲームを作つてゐるから忙
しいのも分かる。

だけど姉さんに同情の余地はないな。
仕事を終わらせないのが悪い。

「『ああー』じゃないわよー 海斗、あんたが怪我してあたしのア
シスタンントをやめる奴が居なくなつたのが原因なのよー？」

「そんなこと言われてもねー。俺も怪我したくてしたわけじゃねー」

「そんなことは分かつてゐるわよ。もしわざと怪我したんだつたら
病院から手当をすつても連れ出して手伝わせたわよー」

「我が姉ながら怖いな。

そんなんだからいまだに彼氏ができるないんだ。

「今失礼なこと考えたでしょ」

「いや、全然」

なんで女の勘はこいつに對しては異様なほど鋭いのか。
この謎を解き明かしたらイグノーベル賞をもらえると思ひ。

「…………でも、無事に退院できてよかつたわ」

「ああそうだな。一時はこのまま意識が戻らないかもしぬ」と言
われたんだぞ。脳波とかその他諸々に異常が全くないので意識だけ
が戻らなかつたからな」

「ずいぶん心配をかけてしまつたようだ」

少しだけ申し訳なく思つけど、俺は高町が関わつてゐることに首を
突つ込むのを止めるつもりはない。

それがどれだけ危険なことだったとしても、関わらずに後悔するよ
りよほどましだ。

「そのせいで退院が許されるまで一ヶ月近く掛かつたしね」

それは本当に困つた。

最初の方こそ楽しい入院生活送れてれど、高町達のお見舞い以
降石田先生からの締め付けがずいぶん強くなつて食べて寝る位しか
やる「」ことが無くなつてきたから本当に退屈でたまらなかつた。

「まあ、無事退院できたからいいじゃな」

「やうね。ああ、言つてなかつたけど」の後はあんたの退院を祝つ
て翠屋で食べることになつてゐるんだけど文句はないでしょ」

「全然ない！」

問題など全くない。
むしろ好都合ばかりだ。

待つていろ高町。

知つていることを洗いざらい話してもいいぞ。

高町は翠屋に居なかつた。

つこせつきまでは居たそつだが急に血相をえて飛び出して行つた
そうだ。

もしや俺が来ることを知つて逃げたのか？

いや2～3日前から俺の退院祝いをするからと云つて予約を入れて
たそつだから今さらになつて急に逃げる意味が分からん。

逃げるくらいならそもそも最初から翠屋にいなればいいだけのこ
とだ。

そつ考えるとあの俺が入院する原因になつた巨大な木が街中に突然
現れた事件みたいなことが起きている可能性の方が高い。

もつとも、そつなつてくるとそいつた類の事件を隠ぺいする方法
を持つているだろう高町達を見つけるのは困難を極める。

俺が被害にあつたあの事件も原因不明で片付けられていたからな。
あれだけの規模の事件を隠し切れるんだ。

俺みたいな素人が見つけようとしたつて見つけられるものじやない
だろう。

まあ、それでもわざかな可能性に縋つて街の方を見てしまうのは止
められないけどな。

それにもあの事件の後から良く見えるよつになつたあの色がず
れた景色は何なんだ？

他の人に聞いてもそんなものは見えないといつし、そのせいでなんかの後遺症かと思われて入院期間は伸びるし、気になつて仕方が無くてストレス溜まるし、教えてくれそなやつとは連絡が取れないし、全く悪いことしかないと云うんだが。

「黙つてないでアンタもなんかしゃべつなさこよ。とこうかアンタの退院祝いなのに主賓のアンタが一番端っこで小さくなつててどうこいつことなのよ」

「バーニングス、退院祝いでも何でもいいから勝手にやつてくれて構わん。だが俺は放つておいてくれ。考え事に集中したいんだ」

普段の俺なら張り切つてこの退院祝いを盛り上げようとしただろう。だが、今の俺にはそんなことより高町どじつやつて話をするかということが遙かに大切だ。

なにせこんなに面白そうなことは他の家族も体験したことないだろ。

絶対にこの機会を逃すわけにはいかない。

「海斗、せつかく退院祝いに来てくれたアリサちゃんにそんな言い方はないだろ？ 謝りなさい」

父さんもひるさいなあ。

けど、謝つておかないとめんどくせそうだな。
謝るだけ謝つておく」と云ふ？

携帯に電話が掛かってきてるな。

誰からだ？

高町からだ！

すぐさま通話ボタンを押して電話に出る。

『あつ、か「海斗だ。話がある。今ビリにこるか言え』』

何か言つていたがそれを遮る。
気がはやつて止まらない。

『ええーっと、今海鳴臨海公園にいるの、えっとそれでね。わたし今からそっちに行くからじつとしてる』『ええーー!』

問答無用で言い放つて、通話を切る。

俺は家族の怒りの逆鱗に触れたようだ。かなり厳しい目で俺を見る。

しかし、そんなことは関係ない。

人の言う「」とを聞くのはまず俺のやりたい「」とをやつてからだ。

「それじゃ、悪いけど俺には今からやることができるので」れで暇させていただきます

そう言つて近くの窓から飛び出す。

後ろで家族やバーニングス達が何か言つているようだが、知ったことではない。

後が怖いんだらうなだな。

まあ、後のことば後で考えよう。

別に命に関わることじやないんだし、後回しにしてもいいだらう。

さてここから海鳴臨界公園までは結構距離がある。

退院したばかりで体力の落ちている俺では走り抜けるか不安だな。

だが、今走るスピードを落とすわけにはいかない。

そんなことをすれば追いかけってきた家族達に簡単に見つめられてしまつ。

せめて家族が見つけるのが難しくなるようなところまで走り続けないとな。

はあ、はあ、はあ、くそつ！

入院生活のせいでここまで体力が落ちてることは思わなかつた。

入院する前まではこのくらいの距離だったら息も殆ど切れずに走れていたのに…

俺が乗れそうな放置自転車を見つけることが出来なかつたら目的地に着くまでにかなりの時間がかかつたことだらう。

さて、海鳴臨海公園に着いたのは良いとして、高町はここのはずいぶんいるんだ？

何気ないここは広いから見つけるだけでが無いと探すのが面倒だ。

馬鹿か、俺は。

携帯があるんだ。これでもう一回高町の携帯にかけてみればいいだけだ。

通話履歴からリダイアルする。

少しの間呼び出し音が響いた後繋がった。

「高町か？ 今公園のどいらへんにいる？」

『えっと、海斗君？ 私は今海が見えるところにいるの』

そりや、ここは臨海公園だから海が見えるだろ？

俺がいるところからだつて見えてるよ…

これは俺が探すんじゃなくて迎えに来てもらった方が良さそうだな。

「高町には質問が難しかったようだ。だから言い方を変えよう。俺は今公園の入口にいる。お前の居場所が分からん。迎えに来てくれ」

『うん！ わかったの！』

ああ、嫌味も通じないか。
まあいい。

高町覚悟しておけよ。

俺とお前があつた時お前に地獄を見せてやる。

俺との約束を破つた対価は高くつくぞ。

やつときたか。

向こうからこっちに向かって走つてくる高町と……それを追いかけている黒ずくめの男は誰だ？

あの服のセンスからしてあの金髪少女と似たような雰囲気を感じる

からあいつも魔法関係者か？

高町が気にしていな」とこりをみると悪い奴ではないようだが……まあ、俺が聞きたいことが聞けるならそんなことはどうでもいいか。

「まつ、待たせたの」

「遅い！ 遅過ぎるぞ高町！」

「わ、私が運動苦手なの知ってる癖にそんなこと言わないで欲しいの！」

高町の都合など知ったことではない。

それに俺が言っているのはそんなことじやない。

「いや、別に」「まあでぐる時間が遅いといいたかったわけじやない」

「え？」

「あつ……」

「高町、俺と約束したよな？ 2週間前お前が俺のお見舞いにきたとき」「

やつと出でたようだ。

「その反応だと完璧に忘れてたみたいだな。これほどひじくくれようか」

さて報復の方法としてとても多くの方法が思い浮かぶが、それを実

行することはないだろ？

少なくとも今のところはな。

そんなことをするよりも、このことを出してよし俺が楽しめる形で高町に聞われるよしだした方がよほどいい。

「ええと、これには深い事情があつてね。えつとね

なこやら高町が必死に弁明しているが知ったことではない。ここはよつ深く問い合わせて俺に対する借りを大きく感じさせないとしづかなければいけないほどものだったのか？」

が大切だ。

「ほほう、その事情とやらは俺がこの2週間ずっと連絡を取りつとお前の家族に伝言し、携帯に電話をかけてもらつたのを完全に無視しなければいけないほどものだったのか？」

「…………そこまでじやないです

ちつ・

もう少し粘つてくれればより追いつめられてやれたのこ。
まあ、ここはこのくらいにしておこう。後ろで見ていた黒ずくめの男が止めに入ろうかどうか悩んでいる感じだったからな。
俺の性格が悪いことを確信されると後々面倒だ。

「貸し1つだからな。後できちんと返してもいいだぞ？」

「うううううう、海斗君に借りなんか作つたら身包み剥がされるどこのじやすまない気がするの」

「ふん！ お前程度のプロポーションじゃ身包み剥いだとこりで碌

に金にもならん」

「こくらなんでも鼻で笑つ」とはないの！ それに私はこれから成長するの……」

まあ、そりや成長するだろ？

さすがに小学3年生で成長が止まるなんてことはないだろ？からな。

止まつたら止まつたで一部の趣味の人間に需要が生まれるだろ？が。

さて、これで高町に俺に借りがあることを認識せしむことができたから、これでほぼ確実に魔法に関わることができる。後は目の前にいる男との交渉を終わらせればいい。

「じつのは終わりましたので、次はそちらの話をどうぞ？」

「ああ、そつしたいといふだが立ち話もなんだ。アースラに案内したいと思つんだがいいか？」

アースラとが言つのがこいつの拠点なのか？
まあ行つてみればいいか。

「もちろんだ」

足元に浮かび上がるなんか変な光る模様、そして次の瞬間俺の見ている景色が切り替わった。

おおーー！ すげー！ なんだこいつの世界に来たみたいな感じだ！

マジで見学とかしてえ！

だけど隣の変身ショウも気になるな。いつたいどうなつているんだ？

高町の服が一瞬で切り替わったぞ！

あれか魔法少女ものに付き物の変身シーンはないのか！？

いや、あつたとしても高町のだから俺にとつてはどりでもいいか。

今の高町は俺のストライクゾーンに入つていない。

それよりフィレットが人間になつたことの方が圧倒的に興味深い。
確か世界には質量保存の法則とやらがあつた筈だ！

兄が言つていたのをかすかに覚えてるだけだがそんなのがあつた
筈だ。

それを真つ向から無視している。さすが魔法だ。

まあ、そのことについては後で聞けばいいか。

それより

「なあ、見学していいか！？　いいよな！！」

返事など聞かずに走りだす。

「おい待て！」

「待てと言わされて待つ奴はいない！」

これ一度言つてみたかったんだよな。
マジでここに来てよかつた。

「そつかなら実力行使だ」

「は？」

空中から突然現れた光の輪みたいなので足を拘束されてしまった。

しかも走っている途中でそんなことをされたものだから顔から床にダイビングする羽目になった。

くそ！ 倒れた時にぶつけた顔が痛い。
感覚からして血は出てないみたいだが、痛いものは痛いぞ！
それに歯が折れたらどうしてくれる！

俺の前歯は永久歯なんだぞ！

足を拘束している光の輪を外そうとしてみるが、いくら力を込めてみても緩む気配すらない。

「何をするー？」

これが魔法なのか？

口では不満そうな声を出していたが俺的好奇心は魔法を見れて結構満たされていた。

まあ、それ以上に新たに好奇心が搔きたてられているわけだがな。
「君の思い通りに行動させていると話が進まないと思ったのでな。
安心してくれバインド 자체に害はない」

そんなことはどうでもいい。

このバインドとやらに拘束されているのも最初の5秒くらいは初めての体験だから楽しめたがもう飽きた。
俺に縛られる趣味はない。

「そんなことよつさつとこれを外して、俺をいいの探索に行かせろー！」

「いっちの話が終わってからだ。その後は艦内を案内してやるから
それまで待ってくれ」

むう、確かに全く見知らぬ「こ」を探索するなら案内があつたほうがいい。

うつかり機密区画とかに踏み込んで殺されたくないしな。

「こ」は言つことを聞いておくか。

「分かつたからこのバインドとやらを解いてくれ。」「

「君は人の話を聞くのが苦手な様だからな。このままの状態で連れて行く」

「何！俺は引きずられていいくのか！？」

どう考へても体格的に俺を抱えたまま動くことができないと思えない。それとも魔法的な何かで力を強くできるんだろうが？

「さすがにそんなことはしない。『フローター』で浮かして運ぶ

うお！

体が宙に浮いたぞ！

なんだこれも魔法か！？

だとしたら魔法最高！

宇宙游泳ってこんな感じなんだうつなー。

「おい！あんまり動くと落ちるぞー。」「

そんなこと知ったじやな、「ぐふつー。」

痛い。

また床とキスする羽目になつた。

うん、人の言ひとは聞いた方がいいな。
自分が初体験することは特。

「ふう、いわんこちやない。また『フローター』かけ直すから今度こそはじつとしていてくれよ?」

「分かった」

もつ落ちて痛い思いをするのはじめんだ。

そう思つてた少なくともフローターをかけ直される前まではな。

「こやつはー! ぐふつ!」

浮いた瞬間じつとしてこるのが我慢できなくなつて思いつきり動いてしまつた。

そしてまた落ちた。

痛い。

痛いが、フローターかけてもらにながら動くのマジで楽しいな!

このへりこの痛みならが必要経費として我慢できるだ!

「君つてやつは……………しうがないバンドを重ねがけするか」

「なー?」

くそつ!

新たに現れたバインドの輪に口と両手まで拘束されてしまつた。

猿轡噛まされるつてこんな感じなのかな?

そのせいでほぼ身動きが封じられた。出来るのは毛虫みたいに動こ

「うと足搔く」ことだけだ。

「む！」、三ぐおがあが

くそ！

言葉もまともにしゃべれないか。これでは文句が言えん。

「さてそれでは行こうか」

すれ違う人に何事だつて顔されながらの旅は結構精神的に辛いものがあつた。

やはり見せ物になる心構えができるいるかいないかは精神的ダメージの大小に大きく影響するな。

そしてたどり着いたのは日本庭園もどきといつべき場所だ。
そこでなにやら味覚障害の人、リンディー＝ハラオウンと言つりし
い、と黒ずくめの男、クロノ＝ハラオウンと言つらしい、とな
達が話をしていたがようやく終わつた。結論としてどうやら2人ともこの時空管理局とやらの指示に従つてジュエルシードとやらの回
収をするようだ。

それにしてもあの青い石ころがそんな危険物だつたとは知らなかつ
たなー。

となるとあの俺が入院する原因になつたあの事件もジュエルシード
が原因なのだろうか？

まあ、過ぎた事だしビリでもいいか。

それよりも俺が何でここに呼ばれたのかを早く知りたい。

「えーと、やつらは元々からこの時空管理局とやらを知っている側にいたようだし、高町は凄まじく高い魔力を持つていてるそうだから理由づけは簡単にできたんだが、俺がここに呼ばれる理由が全く分からんんだが？」

「待たせましたね海斗君。ここからは君を何でこのアースラに呼んだかという話です」

「おお、やつと俺の疑問に答えが出るのか。

「私達としても最初は貴方を呼ぶつもりなどなかつたのですが、どうしてもあなたを呼ばなければならぬ事情ができました」

「なんだ？」

「なんだ？」

「もしかして俺に何か秘められた力でもあるとか？」

「それはない。」

「色々漫画的な方法でそんなのが無いかどうか試した俺が言つんだ間違いない。」

「いや、本心では間違いであってほしいが、現実に今のところそんなものは見つかっていない。」

「もつたいぶらうにわいつたと書つてくれると助かるんですが？」

「じらされるのは嫌いだ。」

「あのじらす時の優越感は大好きだけど。」

「自分がやって楽しいことでも他人にやられた途端不愉快になる」とは多い。」

「ええ、それじゃあ单刀直入に言いましょう。貴方とジュエルシー

ドが融合してしまっています。貴方を呼んだのはそれをビリにかしぬければならないからです」

ジユエルシードが俺と融合?

そんなことになつた覚えはないんだがな。

「融合ってどんな感じになつているんですか?」

「私達が詳しい検査をしたわけではないので詳細は分かりませんが、
ゴーノ君によると君のリンクアコアとジユエルシードが融合してい
るようです。原因は私達は『大樹事件』と呼んでいますが貴方が瀕
死の重傷を負つたあの事件です」

「高町とゴーノが俺を治してくれたんじゃないのか?」

ゴーノによると治療しようとしたが全く魔力が足りそうになくて、
その上無茶を続けた高町の魔力が切れてそのせいで俺の方に倒れ込
んだそうだ。

で、高町の持つている杖、デバイスと言つらしいが、が俺胸に当た
つたらしい。しかも丁度俺がジユエルシードを入れていたポケット
の辺りに。

回復魔法を使つていてるゴーノに魔力を供給するために魔力を集めて
いたデバイスがジユエルシードに直撃したせいで、ジユエルシード
が発動し、一番近くにいた俺の『死にたくない』という願いを叶え
たそうだ。

そのおかげで死にかけていた俺の怪我はあつという間に回復したと
いうことだが、その代わりにジユエルシードが俺のリンクアコアと
融合してしまつたそうだ。

「つまりジユエルシードのおかげで俺は助かった？」

「その通りです。でも、それはとても危ういバランスの上に成り立つています」

まあ、そりやそうだらう。

さつき高町達に話していたことからすると、このジユエルシードは世界を滅ぼしかねない超絶危険物だ。

それが俺の体の中にあるなんて最悪極まりない。

いつ爆発するか分からぬ核爆弾を抱えている様なものだ。

「どうにかできませんか？」

「その方法を探すためにアースラで検査を受けてほしいのですがいいですか？」

「もちろんです」

俺の命が掛かっているんだ断る理由はない。

それにも丁寧な言葉で話すのは疲れるな。

まあ相手の人となりが分かるまではこのままでいくけどな。

検査自体はすぐに終わつた。

なんか変なカプセルみたいなのに入つて10分くらいじつとしているだけで終わつたからかなり拍子抜けした。

今は検査結果を医療スタッフの人が精査しているらしい。

その間俺は色々な映像を見る許可を貰つて暇を潰している。

その為にデバイスを渡された。デバイスは魔法の発動媒体としてだけではなく多機能端末としても利用できるそうだ。

つか、ミッドチルダとやらの映画もそこそこ面白いけど、それ以上に他の世界を巡った旅行ドキュメンタリーが俺のハートを直撃した。

だつて、ドラゴンがいるんだぞ！

CGとかじゃなくてリアルドラゴン！

興奮したね。滅茶苦茶興奮したね！

ドラゴンは魔法を使って飛んでいるらしく、その巨体に似合わない高速で飛びまわっているし、口からは火を噴く奴や雷を吐く奴そういうらしい。

生でドラゴン見てえ。

けど、繩張り意識が強いらしいドラゴンを一般人でしかない俺が見るのは困難を極める様だ。

なにせこの撮影スタッフもAランク以上の魔導師だけで構成された特別編成でやつとのことで撮影されたものらしい。

事実ドラゴンから襲われるところもカットされずに映つているが、スタッフ達が必死に生き延びようと応戦する音声とともに入つていて、そこだけ戦争映画みたいな感じになつてるからな。
あつ、1人喰われた。

これは何とかして魔導師になるしかないな。

一応リンクカーコア自体はあるらしいから、魔導師になれないことはないと信じたい。

もしなれなかつたら高町に頼んで俺の護衛をしてもらおう。
あいつは中々優秀な魔導師になる才能があるみたいなことをコンティ
イさんも言つていたからな。

「これは予想外の結果ね」

「そうですね艦長、まさかジュエルシードがいまだに活動状態とは
思いませんでした。怪我をしたのは1か月前と言つことだったので
既にジュエルシードによる怪我の回復は終わつているものだと思つ
ていましたが、まだ半分程度しか終わつていないと」

本当に予想外だ。

ジュエルシードほどの出力があれば、死んでいない限りあつといつ
間に怪我など治つてしまつはずだ。

それなのにいまだに半分程度しか怪我が回復していないことによ
は他の何かにその出力が使われているということだ。

「しかも使われている用途が用途です」

「ええ、これはまずいわね。最悪、『海斗君』が死にかねないわ

全くもつてその通りだ。

なんといっても使われている用途が身体改造だ。
いや、改造と言うには語弊がある。

なにせ検査結果によると1秒も経たないうちに体の成分組成が完全に変化することすらあつたのだ。

「もはや生まれ変わったと言つても過言ではない。

そのせいでジュエルシードのモニタリングデータ以外は碌に役に立たないし、こんな変化が続いて行けばそう遠くないうちにあの海斗という人格そのものが崩壊するだろう。

むしろ1ヶ月以上この状態だったのにもかかわらず、依然と変わらない自我を保つているほうが異常なのだ。

「かといって体の怪我が完全に治るまでジュエルシードを封印するわけにもいきません。怪我の完治前にジュエルシードを封印すれば治り切つていない怪我が傷口を開くでしょう」

「そうですね。心臓に肺などの主要な臓器が一斉に機能不全に陥れば、このアースラの設備では延命処置すらできずに死ぬ可能性の方が高いでしょうね」

となると僕達にできることは海斗の怪我の完治を待つてジュエルシードを封印することくらいだ。

幸いジュエルシードその物の封印は簡単にできる。

リンカーコアと完全に一体化していたらそれも難しかつただろうが、ユーノによると1か月前は殆どリンカーコアと融合していたジュエルシードだが、今は半分ほどリンカーコアから分離している。このペースならば後1ヶ月ほどでリンカーコアとジュエルシードが完全に分離するだろう。

そうなれば後は封印するのに障害はない。

「私達にできるのは怪我が完治するまで『海斗君』が死なないよう願うことしかないのですね」

「…………」

母さんが言つ通りだ。

僕達にできることは無事に済むよつて願つことだけだ。
なにせジユノルシードの願いを叶えるといつ効果に制御できるのは
願いを叶えている本人だけなのだから。

それにしてもいつたいどんな願いを持つていればこんなことが起き
るのだろうか？

普通なら願いとこつものはある程度の方向性を持つてゐるはずなの
だがこれには全くそれが見られない。
まあ、本人に話す時に聞いてみればいいだろう。

「やつときたか」

「ああ待たせて悪いね。それで検査結果だが「ああそれはどうでも
いいよ」「は？」

そんなに畠然とした顔をしなくてもいいと思つんだがな。

どうせ俺にどうにができることがあるとは思えないし、それならそ
んなことに時間を割くより魔法が使えるようになるために努力した
ほうがよほびい。

「そんなことより俺に魔法を教えて下さー。この魔法教本を呼んで
みたんだが全く理解できないんだ」

「悪いと思つがそれは無理だな」

やはりそつ簡単には教えてもらひえないか。
だがここで諦めるつもつはない。とこつかいで諦める意味が分からん。

自分がやつたことはやれるつむくなるまで押しつかすのみだ。

「理由を聞いていいですか？」

それでどんな理由が出てくるのか。

何とかその理由に穴を見つけることができればいいのだが

「ああ、それは簡単だ。君が魔法を使つては非常に危険だからだ

よし、俺は魔法を使えないといつ訳ではないよつだ。

少なくともその素質くらいはある。

そうでなければ俺が魔法を使つと危険とこつ言い方はしないだらうからな。

それにも俺が魔法を使つては危険とほびつこつ意味だ？

高町なら問題なくて俺はだめ。

ならやはりジユエルシードが関係していのつか？

「その俺が魔法を使うのが危険ところのはジユエルシードが関係しているんですか？」

「その通りだ。ジユエルシードは君のリンクカードと融合している。この状態で魔法を使えば最悪ジユエルシードが暴走する可能性がある。そして困つたことこやつなる確率は非常に高い」

なるほどやつらが。

「なら俺の体からジュエルシードを取りだした後なら魔法を使わせてもらえるんですか？」

「君がそれを望み、試験に合格したのならばな

さすがに無条件とはいいかないか。

高町は既に即戦力といつていいほどの能力を持つているから例外なのだろうな。

まあ、いずれ魔法を習うことができるなら良いか。

それなら今は魔法教本の暗記と体力を入院前のレベルに戻すことには集中するか。

理解できなくとも暗記はできるし、体力はあるにこしたことはないだろう。

「そりゃそれなりいです」

さて、魔法教本の暗記をすることにするか。

確か98ページまで読んでいたはずだ。

そこから読み始めるか。

「ちょっと待ってくれ。君はそれでいいのかもしれないが、僕にも説明義務というものがある

読書の邪魔をしないでくれといいたいところだが、この魔法教本は紙媒体じゃないからな。

クロノの意志1つで表示を消されかねない。
ここは素直に言つことを聞いておくか。
仕草で先を促す。

「まず君と融合しているジュエルシードだが、これは後1ヶ月ほどで封印して取り出すことができるだつ。あくまで予想ではそういうだけだけだ」

「ということは俺が魔法を習い始めるのは1ヶ月後と言つことか。待ち遠しいなー。」

「それとジュエルシードが君と融合した影響でだが、君は人ではなくつている」

「は？」

いやいや、それは完全に予想外だ。

ちょっとばかり普通の人と違うようになる程度は覚悟していたが、人でなくなるというの完全に予想外だ。

「君がどんな願いを持つてているかは知らないが、君の願いを受けたジュエルシードが君の体の改造を秒単位で行つてはいる。そのせいで君は生物的には到底人といえる存在ではなくつている」

あー、そういうことか。というかジュエルシードって本当に凄いんだな。

……また、ということは今俺が成りたい姿とか持ちたい能力を願えばジュエルシードがそれを叶えてくれるのか！？

「もしかして俺が今何か願えばその願いをジュエルシードは叶えてくれるんですか？」

「理論上はそなだが止めておいた方がいい。ジュエルシードには願

いを選別するところの機能が無い。君がただ一つの願い以外を全く考えずに無心に願うことができるならともかく、そうでなければ君の人格そのものが消滅するような事態になる可能性の方が圧倒的に高い」

あれだな矛盾した願い事を持つたらその瞬間アウトなんだな。

無理だな。

俺の願い事は多過ぎる。

一つの願い事だけをするなんてことは到底無理だ。

「どうかそつなると俺が今こいつして自我を持つていて」とって相手すうじい奇跡?」

「やつなるな。普通ならどうして自我が消滅して化け物になっている

まじかー。

俺がこじりて生きてこむ」とが奇跡かー。

「やつか、ならジユエルシードに願わないように氣をつけよ」と
ないといけないな

「僕としては君の本当の願い事を聞いておきたいんだが?」

「どうこいつですか?」

「やつを言つたが君の自我は普通ならどうして消滅してくるはずだ。
なにせ君の身体改造に対象には脳も含まれていたからな。自我が消滅していないほうが異常だ。だが、現実に君の自我は消滅せず同一性を保つている。その原因はやはり君の一番強い願いが関係しているのではないかと思つてね

俺の1番強い願いかー。

一応バニングス達に言つたあれが俺のなかで1番強い願いではあるはずなんだが、それが俺の自我消滅を助けているとは考えにくいしな。

いやジユエルシードによつて俺の頭の中に量子コンピューターが生み出されてゐる可能性も無きにしも非ずだが。頭の中に無機物の塊がある状態を見逃すはずの無いだらつて、この可能性は考えなくてもいいだらう。

ふむ、俺の1番強い願いとは何なんだらうか？

「いや、すぐに思いつかないならば言わなくて構わない。下手に考え込んだりするとその考えたことにジユエルシードが反応する可能性があるからな」

俺には思想の血田じこりか思考の血田れえ無いのか。
鬱になるなー。

いや、鬱にはなるな！

どの程度の強さの願いにジユエルシードが反応するか分からぬ。今考えたことがすぐさまジユエルシードに叶えられることがないのは今までの短い経験でも何となく分かっているが、それでも用心するにこしたことはないだらう。

……………」のままだと本当に考える血田すらなくなりそう
うだな。

それについて自分が自分で無くなるか分からぬといつてはひとつもなく怖いな。

まあ恐怖程度なら楽しいことに夢中になれば消せるから問題ないか、
「すぐには思いつかないです。まあ、そんなことより気分転換の為
に見たいものがあるですけど探し方が分かりません。教えてくれま
せんか？」

このタッチパネルも使い慣れれば随分楽なんだろうが、キーボード
入力しか知らなかつた俺にはまだ荷が重い。
つーか、機能が多く過ぎてどうやつたら使い慣れるかの日途すら立た
ない。

多機能過ぎるのも考え方のだな。

「何を探しているんだ？」

「ドキュメンタリー番組の未知世界探索日誌」

「…………ああ、あれか。もしかしてもう見たのか？」

あれ？
なんかクロノが妙な空気になつたぞ。

「見たけどなにか問題あるんですか？」

「いやあれはかなり酷い残酷な描写があるからな、18歳未満は基
本的に視聴禁止なんだ。見ようとした時に年齢確認が無かつたか？」

「あつた気がします。無視したけど」

確かにドラゴンブレスにこんがり焼かれてた人間も映つていたから
な。

いや、それ以上に生きたまま人間が喰られてた映像の方が衝撃的か？
内臓出てたし。

「君の基礎情報だけでも君に貸し出したデバイスに登録しておくれ
きだつたな。そつすればこんなことにはならなかつたのに」

「いやいやいや、それは困る！ 僕が一番気に入つた番組がこれな
んだから！ これが見れなかつたら困る！！」

「…………大の大人でも吐いた人間がいた番組なんだがな、それ」
確かに目の前でこの番組と同じことが起きたら俺も吐くだろうし、
漏らしてしまう可能性も高いが、画面の向こう側の出来事なら何の
問題もないぞ。

むしろ滅茶苦茶楽しめる。

「まあ、そんなわけでその番組は視聴禁止だ」

「横暴だ！！ 知る権利の侵害だ！！」

もつ言葉遣いなんてものを気にしてられるか！

抗議する時はとにかく声を大きくして、 の権利とかを主張すれ
ば言つてることが正しそうな感じになる。

たとえそれがどうしようもなく利己的な理由からの抗議であつたと
してもな。

「規則は規則だ。もし18歳になる前に見たいのなら、そのドキュ
メンタリーを撮影した特務5課に入ることだな。そうすれば職務上
の必要性があるということで視聴できるようになるだろ？ もつと

も入るのはかなりむず「じゅうたら入れるんだ!—」

その何とか課に入らないと見れないといつのなら入るまでだ。
やりたいことの邪魔をする障害は実力でぶち壊してやる。

アースラでの日々

この1週間勉強漬けの毎日だ。

もちろん面倒にも感じるし、他にやりたいこともたくさんあるが勉強を止めようとは思わない。

それに面倒事ばかりではない。

興味があることを知ることができたときの喜びは凄まじいのだ。

もちろん勉強している目的はあるドキュメンタリーを見るために管理局に入局できる様にだ。

もつとも俺が入ろうとしている時空管理局特務5課、別名『未知世界探索課』、かなり試験が難しいようだ。

合格率が5%切るとかほんとふざけてると思ひ。

しかも受ける人数が多いから合格率が下がつてるとかじやなくて、そもそも受ける人数が少ないので合格者も絞つっていてこの数字のようだ。

おかげで管理局内で一番人手不足が深刻な部署らしい。

人気ない癖に試験が難し過ぎだ。少しは簡単にすればいいのにとか思つてクロノに言つてみたところ、仕事が仕事だから今の試験より難易度を下げることは不可能だそうだ。
ちなみに職務内容は大きく分けて3つ。

1つ目は別名の通り新たに発見された次元世界の調査。その世界の生態系の調査や知的生命体の有無を調べること。

2つ目は新たに発見された世界にロストロギアが無いか調べること。
世界によつてはロストロギアが何も知らない人の手によつて露店で

売りに出されていることすらあるらしいし、原住生物に爪とぎ替わりにされてたこともあつたそうだ。

世界を滅ぼしかねないロストロギアがそんな扱い受けているのはどうするな。

3つ目は知的生命体が発見された場合、その社会調査とその世界の言語に対する翻訳魔法の作成。

どんな社会を作っているか調査し、交流できるように翻訳魔法を作り、もしその知的生命体が次元の海に出ることができるべきの文明をもつていた場合、管理局との仲介役になる」とも含まれる。

こんな感じなんだが、特に3つ目のせいで試験の難易度が急上昇しているそうだ。

まあ、それは分かる。

下手すれば世界間の戦争になるかもしないからな。

『異世界の人間がやってきていて実は自分達は調査されていたのだ』とか聞いたら不安になる人間は多いだろう。

過剰反応した人たちは「こちらに戦争を仕掛けるための偵察行為だ」とか言いだしそうなことでもある。

そんなわけで人格面での試験と心理テストに面接、政治に関する論文と集団心理学に関する論文に言語学に関する論文の提出まで有る。1つ目と2つ目の仕事だけで生態系に関する論文と知識、ロストロギアに関する知識を測る試験があることを考えるとどれだけ難しいかが分かる。

もちろん実技で戦闘に関する試験や隠密行動に関する試験もあるそうだ。

マジで合格させる気があるとは思えん試験内容だ。

俺は合格して見せるけどな。

その為にアースラ内のデータベースを使って必死に勉強中だ。

もつとも勉強は捲っているとは言い難い。そもそも勉強する内容が小学3年生の俺には難し過ぎるといつもあるが、それ以上に誘惑が多過ぎる。

アースラのデータベースを使っていると俺の興味を引きそうな単語がどんどん出てきてその誘惑を振り払うのに時間が掛かつた。今はクロノに紹介してもらつたりミエッタさんに資料の検索をしてもらつておおかげでそんな事はなくなつたんだが、やはり勉強する内容が難し過ぎる。

これはやはり年単位で勉強の計画を立ててやるしかないのかな。そうなると今やるべきことは基礎を身につけることだ。

地道に小学校レベルのものから積み上げていくか。

目標としては6年だな。

6年後には試験に合格して見せる。

「凄い集中力だな」

クロノ君の言う通りなの。

この1週間勉強以外のことを自分からしている姿を見てないの。そのせいであれが本物の海斗君なのかイマイチ信じ切れないの。

実は別の人間が変装してゐるって言われたほうがよっぽど信じられるの。

「本当に貪欲なまでに知識を身につけようとしてるよね。僕もロストロギアとか歴史関係の勉強には力を入れていいけどあそこまで集中してるとは言えないなー」

ユーノ君は十分勉強を頑張つてゐると思う。でも私はあそこまで本気になつて何かに集中したことは魔法に出会つた今でもないの。

「知らないこととか知りたいことは遠慮なく知つていてる人に聞きたくなるから学習するスピードも速いしね。私も1日に何回も聞きにこられてその熱心さには感心したよ」

うん、エイミーさんに何か聞いている姿はよく見たの。
でもそれ以上にクロノ君とリンクティーさんに何か聞いている姿はよく見るの。

「僕のところには戦闘関連のことで聞きに来ることが多いし、母さんところには艦長として氣をつけていろいろなんかを聞きに來ているようだ」

本当に凄いの。

だけど私も負けないくらい頑張るの！
だってやつと私のやりたいことを見つけたんだからー！

「海斗君、貴方はいい加減家族との連絡を取った方がいいと思つんですが、どうですか？」

そのことにひりてリンクティイ艦長の言つことを素直に聞くつもりはない。

どうせ今帰つたところで怒髪天を突く勢いで怒つた家族と会うことになることは目に見えているからな。

そんなことに時間を取られるより勉強に時間を割きたい。

ただそのことを正直に言つても納得させられるとは思えないので他の理由で誤魔化しておくれ。

「ジユエルシードが俺の体から無くなるまでそのつもりはないですよ。こんな危険なものを持ったまま家に帰るなんてことはできませんよ。それに俺がアースラにいた方が管理局としても都合がいいでしょう。」

これでいいはずだ。

ジユエルシードなんて危険物はできる限り自分達の管理下に置いておきたいはずだからな。

「それはそうですが、1人の親としては子供が電話一本をかけた後、一切連絡もせず家出し続けているという状況は見過じせませんね」

あー、そう言えばこの人も1児の母だったな。とてもそろは見えないけど。

「それに下手をすれば私達が誘拐犯扱いされかねません。だから私達としてもなのはさんの家と同じように1度貴方の家にうかがつてご家族と話し合いの場を持ちたいのですが？」

……ひつやつて説得したものか。

俺としては家に帰るのはできる限り遅い方がいいのだが……

……こやこには考え方を変えよつ。

どうせいつかは家に帰らないといけないんだ。

それならいつ家に帰るかをこの話し合いで決めておくことにしよう。強制的に帰宅させられてそのせいでここでしか勉強できないことが勉強できなかつたら困る。

そうなると家に帰るまでに重点的に勉強しておくべき、家に戻つたら勉強しこくことを洗い出さなくちゃいけないがそれは後でいいか。

確かにこの1週間、俺に融合しているジュエルシードが急速にリンク一コアから分離していたはずだ。

このままのペースでいくと後2週間程度で完全に分離するやうなので、ここは電話をかけることで見逃してもらつて家に帰るのはジュエルシードを俺の体から取り除いた後だ。

この条件は譲れない。

ジュエルシードがなんの拍子に暴走するか分からぬ以上、そんなものを抱えたままい家に帰る気にはなれない。

…………あれ？

結論が最初に考えた言い訳と同じようになつたような気がする。ところことは俺は無意識に最適解を導き出していたのか。

俺すげえ！

ところの冗談はさておき。

「2日に1回電話をかけるので家に帰るのはジュエルシードが俺の体から無くなつた後にしてもらえませんか？ 安定状態に入つてゐるとはいへ、もしもジュエルシードが暴走したときのことを考へると今家族と会う氣にはなれないと」

情にも訴えかけてみる。

「これで俺は家族思いの良い奴に見えるはず。」

いや、この一週間全く家族を気にかけたような言動をしなかつたからさうは思われない可能性も高いけど。

「……………そうですね。それでひとまず手を打ちましょう。電話があるだけでも、この家族の不安はある程度取り除かれることが多い。でもジユエルシードを取りだした後はきちんと家に帰つてもらいますからね？」

返事の前の間がちょっと氣になるけど俺の提案が通つたから気になくてもいいか。

「はい、分かりました」

まあ、それは仕方ないだろう。

一時期はアースラでミッドチルダまで密航しようとも考えたが、無理だと分かったしな。

はあ、できれば家に帰つてもあまり怒られずに済んでほしいものだけど、俺が怒られないなんてことはあり得ないんだろうなー。

それからの日々は戦闘関係の勉強を中心によつた。

これはアースラにいる間じゃないとできないからな。

魔法を使う許可が下りなかつたから実技はできなかつたけれど戦術関係を覚えて、シミュレーターでその確認をすることがへりこならできた。

それでもシリコーラーすぐえな。ここまで真に迫った再現をすることができるなんて。

よし、俺が頑張る理由がまた一つ増えた。

こんなものを作れる技術があるなら、シリコーラーを応用してゲ

ームを作ることもできるかもしない。

少なくとも元の世界で量子コンピューターを作りたいとするより簡単にできる可能性が高い。

ただこのシリコーラーと同じ技術で作ると現実の体を使ったゲームになるし、そうなるとレベルアップの概念とかが適用しにくいやら、結局ゲームの中に入る技術を作らないといけないんだけどな。

その他にやつしたことといえば試験に合格するために必要な勉強の資料をデバイスに詰め込んだことだ。

これは家に帰つてからも勉強するためだな。

まあそのせいで容量をかなり圧迫して動作が遅くなつた上に、ほぼ魔法の使用が不可能になるという事態が起きた。

記憶領域を拡張するためにパーツを足して、さらに拡張メモリを大量に追加してもらって何とか動かしているけど、なんかこじてした格好悪い見た目になつたのが不満だ。

もつとすつきりとしたデザインにはならなかつたんだろうか？

俺には今のデバイスに関する技術的限界とかいまいちわからぬいからそう思うだけで、実は結構凄いことしてくれてるのかも知れないけど、見た目はダサい。

機能美の欠片もない。

まあ使えるだけましだと思つておいつ。

それにも勉強すべきことが多過ぎるだろー。

文字資料だけでテラバイト単位になるとかふざけ過ぎだ。
映像資料とかを含めたときの容量は考えたくもない。

諦めるつもつはないけどな。

それにしてもこのつるさに音は何なんだ。

なんか赤い照明が点滅してるし、あれか映画とかなんかでも時々鳴つてるアラートってやつか？

もしさうならかなりの緊急事態が起きたんだと思つんだが、どうしたものか。

このままブリッジに行けばもしかしたら派手な魔法戦闘が見られるかもしねえ。

そうなればかなり楽しい時間になるだろ。

それにもし面白そつなことが起こって無くてもデバイスを持っていけば勉強する」ことはできる。

ちょっと集中しこへいだろうナビだな。

あれ？

そうすると行かない理由はないな。

なら行くことにしよう。

ドアを開けてブリッジまで走り出した。

「ここまで走ってきたせいで少し疲れたが、来て良かった！

なんか俺が探してた金髪の少女が海鳴市沖の海上で天変地異起こしてたけど、大迫力で面白いから問題ない。

まあ、家が無事かどうか多少心配になつたけどどうやら結界は張つてあるようだし、今俺が見ている映像以上に酷いことが街の方で起きる」ことはないだろ？。

自分が巻き込まれないとこりで派手な戦闘とか天災とかが起きているを見るのは映画感覚で楽しめるからな。
自分が巻き込まれるなら楽しむなんてことはせずにすぐに逃げるけどな。

おお、高町とユーノがリンクディ艦長の指示に逆らつて出撃したぞ！

2人ともお人好しだな。

まあそこに好感がもてるんだがな。

まあ俺的にはリンクディ艦長とかクロノの対処の方に共感を覚えたんだけどな。

言つてみればなのは達のやつていることは敵に塩を送つている様なものだからな。

まあ、見ているだけの俺にとつてはなのは達が参戦してくれたこの展開の方が面白そだから別に問題ない。

それにしても、もうちょっと躊躇うとかあるかと思ったけど、すんなり金髪少女側は高町達の協力を受け入れたな。

犬耳の女人人がなんか言つてたようだけど金髪少女になんか言われて協力する様にしたようだしな。

いや状況判断としてはそうするしかないと思うんだが、その後も高町達だけに負担を押し付けようとしている様子もないし、普通に協力し合つているのは自分の目で見てもちよつと信じ難かつた。

あの金髪少女も高町達に負けず劣らずお人好しなんだろうなー。

そうなると今度は何でそんな少女が管理局と敵対しているかが問題

なんだけど、まあ所詮他人事だしどうでもいいか。

何か問題があつてもリンティさんと高町達が解決してくれるだらうし、それ以上に事情を知つたとしても俺にどうにかする力はないからな。

精々全てが終わつた後に声をかけて慰める位しか俺がやることはないだらう。

いや、それにしたつてほとんど赤の他人同然の俺がやることはないか。

それにして魔法つですげーな。

竜巻をバインドで捕まえるとか出来るのか。

あれつてただの風だから実体ないはずのになー。

いや、ジュエルシードによつて発生したものだから例外的にできるんだという考え方もできるけど、どっちにしてもすげーな。

おお、高町と金髪少女が光線を撃つた。

俺もあんなの撃ちてえなー。

撃てるようになればいいなー。

おつ、ジュエルシードの封印は無事に終わつたみたいだな。
ここからは魔法少女同士での戦闘になるのか？

「友達になりたんだ」

ならないみたいだな。

つーか高町の奴言葉の選び方が直球だな。素であんなセリフ恥ずかしくて俺でも言えんぞ。

そして結構感動的な場面だったのにそれを邪魔した雷は空氣読めよ
と思う。

雷直撃とか死んだんじゃね、あれ。

うおっ！

なんだ！ アースラも揺れたぞ！

「アースラにも次元跳躍砲撃！ バリアで防ぎましたが、センサー
がダウン！ 追跡できません！」

まじか！

ここも攻撃受けたのか！

.....ここは絶対安全だと思っていたんだけどなー。

実は俺の立ち位置が傍観者じゃなくて当事者だということが判明し
てびっくりした。

いや、このジュエルシード事件に完璧に関わっているのに傍観者だ
と思つていた俺が馬鹿なだけだな。

さてと俺がこれ以上ここに居ても邪魔になるだけだろうし、せっかく
と自分に割り当てられた部屋に戻るか。

見たいものは見れたり、おかげで気分転換もできた。

それではまた勉強に励むとしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9154z/>

Dreame Researcher

2012年1月10日21時53分発行